

文部科学省委託事業

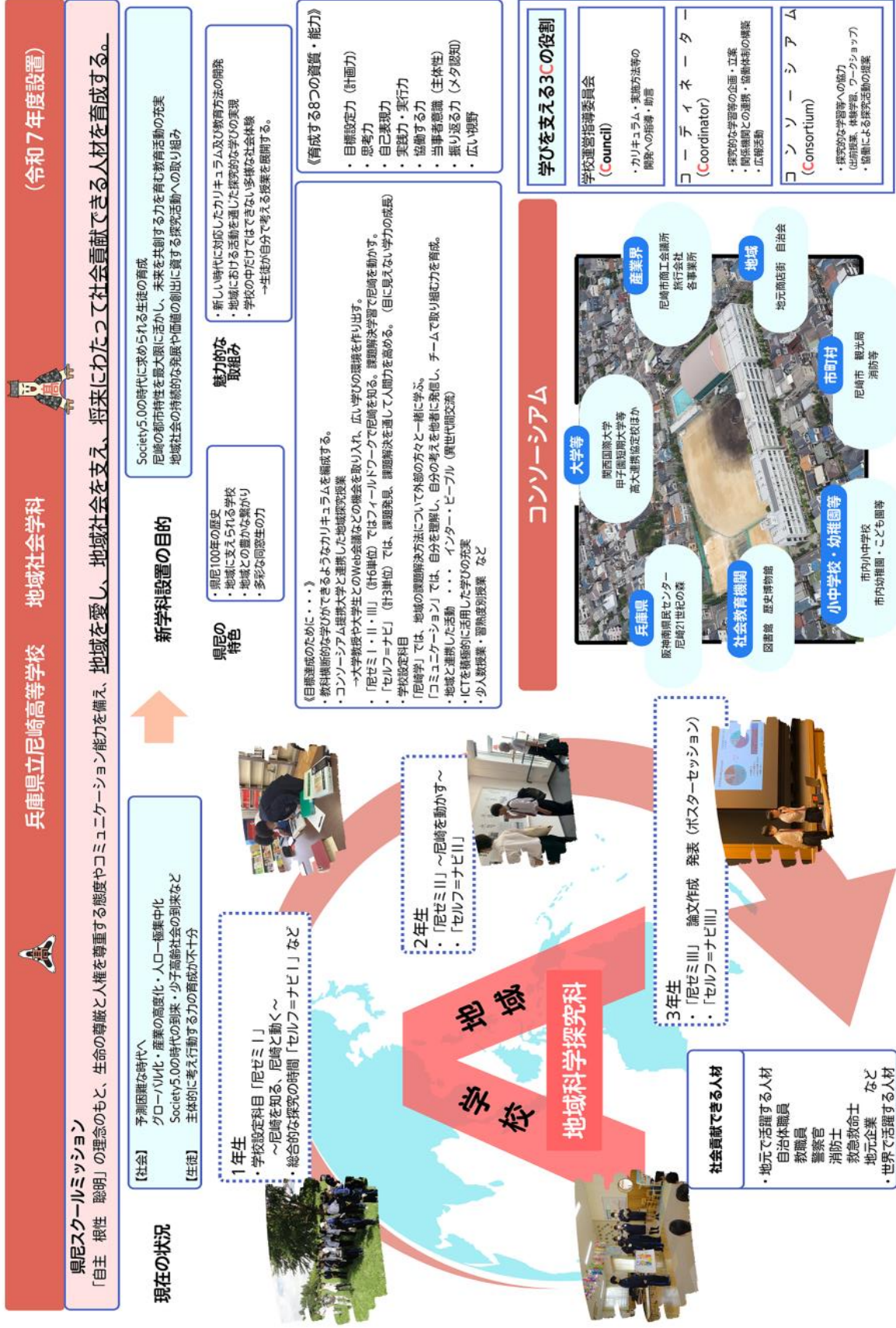
新時代に対応した高等学校改革推進事業 (普通科改革支援事業)

令和6年度 実施報告書



「環境学習フォーラム 2024」での発表（令和6年8月9日）

兵庫県立尼崎高等学校



【兵庫県立尼崎高等学校】 地域科学探究科（種別：地域社会学科）（令和7年度設置）

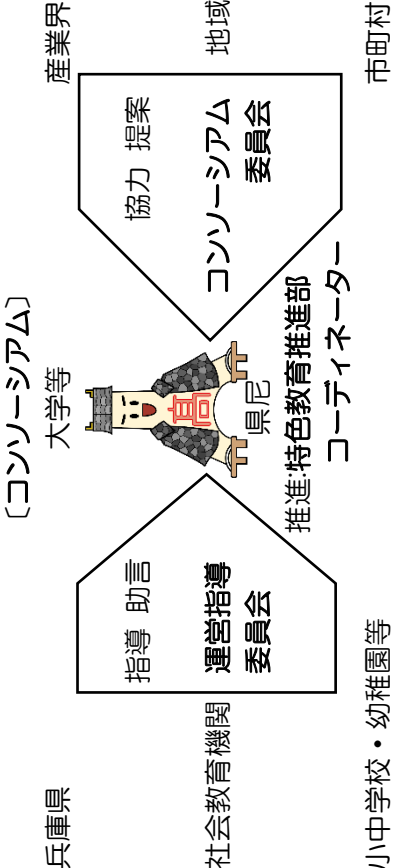
【学科設置の目的】

- Society5.0の時代に求められる生徒の育成
- 尼崎の都市特性を最大限に活かし、未来を共創する力を育む教育活動の充実
- 地域社会の持続的な発展や価値の創出に資する探究活動への取組

【特色・魅力ある教育の概要】

- 改編前の「教育と絆コース」から継承する環境学習・地域貢献活動
- 地域での体験活動に探究学習の要素を加味した活動
- 普通科改革支援事業指定校（兵庫県立柏原高等学校）との交流活動
- 「尼崎を知る、尼崎と動く、尼崎を動かす」をテーマに、コア科目「尼ゼミⅠ～Ⅲ」を通して尼崎市域をフィールドにした探究活動を行う（令和7年度から実施）

【関係機関との連携・協働体制の構築方法】



令和6年度の目標

- 1 改編前の「教育と絆コース」から継承すべき活動の検証・精査
- 2 体験活動に探究学習の要素を加味し、探究することの意義を意識づける
- 3 次年度以降のカリキュラム検討、開発
- 4 外部人材を講師とした講義・研修会等
- 5 コーディネーターの活用
- 6 中学生・保護者・地域への広報活動

取組状況

- 1 現行コースの保育・教育の実習体験活動を検証し、普通科新学科においても意義のある活動を選定
 - ・ 夏季休業中、食育をテーマとした探究課題
 - ・ 大学訪問時に探究学習に関する特別講義
 - ・ 森のフェスタでの制作物に関する探究課題
- 3 特色教育推進部を中心に検討
 - ・ 運営指導委員会での指導・助言
 - ・ コンソーシアム委員会での協力・提案
- 4 生徒向け1回、職員向け2回
- 5 可能な限り教員とともに教育活動全体にあたる
- 6 新学科説明会・模擬授業体験を実施

成果と課題

- 1 「尼崎の森での環境学習」「森のフェスタ参加」「インターピープル開催」は継続実施
- 2 探究活動に関する意識が向上（生徒アンケート結果参照）
- 3 学科独自のスクール・ポリシー、「尼ゼミⅠ～Ⅲ」と「総合的な探究の時間」の指導計画を策定。第2学年以降に検討の余地【課題】
- 4 一定の意識変化はあるが不十分【課題】
- 5 コーディネーター自身が役割を理解。コンソーシアム拡大は次年度以降【課題】
- 6 ホームページの充実が必要【課題】

今年度の取組

(図版1)

7月18日 環境学習（兵庫県立尼崎の森中央緑地）



8月9日 環境学習フォーラム 2024（小田南生涯学習プラザ）



8月26日 職員研修会（講師：関西大学 山田 剛史教授）



8月28日・12月6日 長崎県立松浦高等学校との相互学校訪問（視察）



9月12日 特別講義（関西大学）



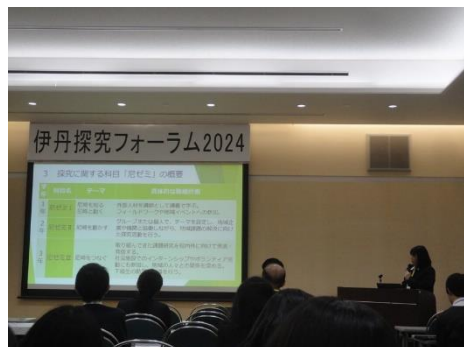
12月4日 職員研修会（講師：兵庫県立夢野台高等学校 田畑 北斗教諭）



1月30日 第1学年（79回生）授業成果発表会（アルカイクホール・オクト）



2月1日 伊丹探究フォーラム2024（伊丹市立産業振興センター）



目 次

巻頭言	2
兵庫県立尼崎高等学校 校長 水嶋 正稔	
I 実施計画	3
1 事業の概要	
2 事業の目的等	
3 実施体制	
4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組	
5 実施計画	
6 成果の普及のための仕組み	
7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み	
II 事業結果説明	21
III 事業の記録	
1 今年度の活動内容	30
2 運営指導委員会の記録	32
1 第1回運営指導委員会	
2 第2回運営指導委員会	
3 第3回運営指導委員会	
3 コンソーシアム委員会の記録	43
1 第1回コンソーシアム委員会	
2 第2回コンソーシアム委員会	
4 アンケート調査	49
1 生徒対象調査	
2 教員対象調査	
3 参考資料	
5 次年度に向けての計画	62
1 学校設定教科「地域探究」の概要	
2 学校設定科目「尼ゼミⅠ」の概要	
3 学校設定科目「尼ゼミⅠ」の年間指導計画	
4 「総合的な探究の時間」の全体計画	
5 「総合的な探究の時間」の年間指導計画（第1学年）	
6 「授業成果発表会」の記録	68

“県尼新時代”の幕開けー地域科学探究科の開設にあたってー

兵庫県立尼崎高等学校 校長 水嶋 正稔

本校は昨年、2024（令和6年）年に創立100周年を迎えました。本校西棟の正面玄関を入ってすぐ右手の壁にタテ1.65m、ヨコ3.00mの古びた銅板が掲げられています。本校創立の経緯をもの言わず語る貴重な資料です。1923（大正12）年、北城内の地に仮校舎が設けられ旧制中学校として尼崎市立中学校が創立されました。銅板に記された方々のお名前の数、寄付された金額からも地域の方々の当地における旧制中学校創設に寄せる熱い思いを伺い知ることができます。それはまさに大正デモクラシーと呼ばれる潮流に見られるような熱気を帯びたものであったのではないかと想像します。崇高な理念と市民の方々の情熱に深く敬意と感謝を表する次第です。

戦後の新たな教育制度のもと、1948（昭和23）年に校名も兵庫県立尼崎高等学校に改称されました。新たに制定された校訓「自主・根性・聡明」のもと、自由を求める戦後の風潮の中、様々な教育活動が展開されてきました。校訓の中でとりわけ目を引くのは「根性」です。現在ある県立高等学校の校訓を見ても、「自主」を謳う学校は数多く存在しますが、「根性」はありません。学校創設までの苦難から始まり、戦前戦後の数々の困難に直面して、本校生徒に求められたのがこの「根性」なのではないでしょうか。「いかなる困難があっても、自らが培った知恵を絞って考え、強い気持ちを持ち続けて諦めず、努力し最善を尽くす」それが校訓に込められた県尼生の理想とする姿です。

さて、地域の学校として創設され、長く地域の方々に親しまれ愛されてきたという本校の伝統は、尼崎市内の中学校出身者の在籍生徒割合にもよく表れており、また平成の時代に創設された「教育総合類型」「教育と絆コース」の特色ある活動の一つ一つにも息づいています。本記念事業の一つである座談会の資料にあるように、「尼崎の教育を担う教員をこの学校から育てる」という創設時の関係者の強い思いをご理解していただいた多くの地域の方々のご協力・ご支援で特色ある教育活動が成り立っています。

創立100周年は大きな節目であり、これを機に次の時代に向けて新たなスタートを切ります。本県では高等学校教育改革第三次計画が策定され、本校においては2025（令和7）年度、現行のコースを新たな普通科新学科「地域科学探究科」に改編します。学校創立当時から今日に至るまでこの県立尼崎高等学校「県尼」に刻み込まれた地域との絆を伝統の柱と位置づけて今後も大切に継承していく所存です。

“県尼新時代”を迎える今年度、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の採択校となったことを心から喜んでいます。この事業を通じて、「県尼モデル」と呼ばれるような都市部における地域に根付いた探究的な学びのプログラムの研究に取り組んでまいります。その成果は地域科学探究科のみに留めることなく、普通科全体に広げ、本校で行われる教育活動実践が「社会に開かれた教育課程」を実現し、多様性の時代に必要な資質・能力を育むことに寄与できるよう努めてまいります。関係者の皆様、今後とも本事業並びに魅力・特色ある県立尼崎高等学校の推進にご協力、ご指導いただきますようお願い申し上げます。

I 事業計画

1 事業の概要

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の 別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	兵庫県立尼崎高等学校 (ひょうごけんりつあまが さきこうとうがっこう)	地域社会学科	令和7年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科、その他普通科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和6年度、令和7年度又は令和8年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

(2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	1学級40名 ×3学年=120 名	学年制	地域科学探究科

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

【学校の特徴】

1923（大正13）年に旧制の尼崎市立尼崎中学校として創立。昨年度創立100周年を迎えた地域の伝統校。全日制普通科で1学年7クラスの計21クラス。各学年7クラスのうち、1クラスは推薦入学で選抜される「教育と絆コース」。特色化を図るため、2008（平成20）年に「総合教育類型」が設置され、2014（平成26）年から「教育と絆コース」となる。核となるコースの科目等は、1年の「総合的な探究の時間（教育＝ナビ）」1単位、2年の「教育体験」2単位と3年の「教育探究」2単位の各学校設定科目。

市域周辺の宝塚市、伊丹市、西宮市等からの通学は可能であるが、本校生の9割は市内公立中学校の出身者であることが大きな特徴となっている。進路先は4年制大学、短期大学、専門学校、就職等多様である。

【研究開発の概要】

普通科新学科「地域科学探究科」の設置は、2025（令和7）年度からであるため、事業1年次の今年度は、現行「教育と絆コース」の生徒を普通科新学科の生徒に見立てて取組を行った。これまでのコースは保育所・こども園や小学校での実習など体験を重視した教育活動であった。よって今年度は、従来の体験活動に可能な限り探究活動を加え、生徒に「探究」の意識づけを図るとともに、コースから新学科に引き継ぐべき取組の精査にあたった。

併せて、次年度開設される「地域科学探究科」のカリキュラム開発を行った。

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

【現在の取組と改編後の科目名称】

	教育と絆コース→地域科学探究科	普通科一般クラスと共通
1年	教育ナビ(1)→尼ゼミⅠ(2)	セルフ＝ナビⅠ(1)
2年	教育体験(2)→尼ゼミⅡ(2)	セルフ＝ナビⅡ(1)
3年	教育探究(2)→尼ゼミⅢ(2)	セルフ＝ナビⅢ(1)

＊(数字)は単位数、「教育ナビ」「セルフ＝ナビⅠ～Ⅲ」は総合的な探究の時間

本学科では、高校生が持続可能な社会に参画するための基礎となる力を「地域探究力」と位置付け、「地域科学探究科」の軸となる学校設定科目「尼ゼミⅠ～Ⅲ」を設ける。各学年2単位とし、「尼ゼミⅠ」～「尼ゼミⅢ」と段階的に履修することで、「地域探究力」を育成することを目標にし、3年「尼ゼミⅢ」で全員が論文の執筆に取り組む。論文のテーマに表れる「問う力」、論文の内容に表れる「論理的に考える力」、論文の考察に表れる「課題解決力」を1年から積み重ねた探究的学びの力(探究スキル)を習得させながら育てていく。

【1年生学校設定科目「尼ゼミⅠ」2単位】

探究対象を身近な地域社会の課題に絞り、地域が抱える課題や魅力を探し、気づきを発信、共有する。社会体験等の独自のプログラムを通して、社会への関心を高め、「地域探究力」の基礎になる問いを立てる力、調べる力、まとめる力、他者の意見を傾聴しながら自分の考えを伝える力を育てる。

【2年生学校設定科目「尼ゼミⅡ」・3年生学校設定科目「尼ゼミⅢ」各2単位】

生徒が考えたテーマを、他者にとっても意味のあるテーマや、社会的な課題に繋がるテーマ(問い)と関連付け、自らの進路に繋がるテーマ(問い)へと深めていく。その方法として、社会施設へのインターンシップやNPOのボランティア活動に、生徒が希望によって参加できる機会を設け、自らの体験を裏付けとして探究を深めていく。テーマ(問い)は地域社会の課題とし、他者に気づきを与えるような深い考察に根差したものとする。活動は、3年生「尼ゼミⅢ」まで継続し、研究論文としての成果に繋げる。

【全体像】

フィールドワークやワークショップにおいて地域と協働しながら、地域の課題について個人及びグループ単位で探究し、課題の本質について考察する。課題に対して実践、フィードバックを行う。いずれの段階においても、地域の専門家から指導・助言を受けることにより、計画内容・実施・事後の検討をより高次なものへと変化させていく。計画の実施後、年度末に報告会を実施する。

【持続可能な社会の形成に関する学習】

持続可能な社会を形成するには、行政が担う部分と住民活動が担う部分とがある。住民活動が担う部分として、行政に対して相談や要望をしたり、意思表示をしたりすることや、一市民として自分ができる活動を考え、ソーシャルビジネスとして仕事にすることが考えられる。このように、将来地域に貢献できる社会人となるための資質・能力を養うとともに、地域が抱える問題を世界とも共通する問題と考え、それぞれの活動をグローバルな視点でも捉えていく。

- ・情報の整理、プレゼンテーション等の技能を習得する学習
- ・社会教育機関によるコミュニティデザインに関する学習
- ・本校を活動フィールドとして地域異世代の方々との文化的・体育的交流

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

本校が立地する尼崎市は、兵庫県の南東部に位置する人口約 45 万人（県内第 4 位）の中核市である。東側に位置する大阪と西側の神戸の 2 大都市との間に、近隣市とともに「阪神地域」という大都市圏を形成している。昭和期には工業都市として発展を遂げていく中で様々な公害問題に直面したが、住民、行政、企業が協力して環境改善に取り組み、現在は国の「環境モデル都市」の選定を受けている。現在は、急速な社会変化における、産業の空洞化や産業活動の低迷が課題となっている。江戸時代まで遡れば城下町として栄えるなど歴史と伝統を有したまちでもあり、下町風情も多く残っている。一方近年では、鉄道結節点を中心に大規模な再開発事業が進められ、地理的環境から多様な人材が集まるまちとしての特色も兼ね備えている。

市制 100 周年を迎えた 2016（平成 28 年）には「尼崎市自治のまちづくり条例」が制定され、「対話・協働・シチズンシップ（市民性）」をキーワードに様々な場面で活躍できるまちづくりが示された。そのようなまちのながれの中、尼崎市と県立高校との協働は、今まであまり行われておらず、未来を担う高校生と市の大人たちとの対話・協働によるシチズンシップの向上を推進していく必要があると考えている。

本校は、地域住民や地元企業の創設への強い熱意と寄付により 1923（大正 12）年、尼崎市立中学校として創設された。1930（昭和 5）年に県に移管され県立尼崎中学校となり、戦後 1948（昭和 23）年には県立尼崎高校となり今日に至っている。旧制尼崎中学校から数え創立 100 周年を迎えた伝統校で、3 万名を超える有為な人材を輩出している。現在も在籍生徒の 9 割は市内公立中学校卒業生であり、生活基盤を尼崎市に置く生徒が多い。

教育制度や入試制度が変わる中、2008（平成 20）年、学校の特色づくりとして普通科の 1 クラスに教育職の人材育成を柱とする「教育総合類型」を立ち上げ、その後「教育と絆コース」へと改編した。コースの名称にある「絆」には、阪神・淡路大震災以降、兵庫県で大切にされてきた人と人とのつながり＝「絆」を大切にし、それを育てられる教員になってほしいという強いメッセージが込められており、学校設定科目における保育園やこども園での「保育実習」、小学校低学年を対象にした「授業実習」や「放課後こどもクラブ」、県立尼崎中央緑地公園内・尼崎の森での環境教育活動、異世代の交流機会である「インターピープル」などの学びを通じて地域に貢献し、地域との絆を深める体験重視の活動を続けている。

また、本校は 2018（平成 30）年から 2 年間、文部科学省の「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」事業の指定校となり、学校設定科目「尼崎学」を中心とした実績を積むことはできたが、コロナ禍が影響し、その実績を十分に継承、拡充できていない現状がある。

創設以来の本校の沿革、取り組んできた教育活動の成果と課題、本校生徒の実態などを鑑みると、兵庫県の「県立高等学校教育改革第三次計画」実施に際し、本校「教育と絆コース」を普通科新学科「地域科学探究科」に改編することにより、新学科に学ぶ生徒に生活基盤とするコロナ禍以降の地域社会が抱える諸課題に対応できる力を身に付けさせることができると考えている。「地域探究」は、山間部等の学校が人口減少や地域活性化のために、課題解決に取り組むというイメージがあるが、都市部にも地域課題は山積している。都市部における地域に根付いた探究的な学びのプログラムを研究するには、尼崎市は絶好のフィールドである。本市には、生きた課題が多く存在し、本校生徒も当事者意識の強い課題設定を行うことができる。新学科の設置と教育活動実践は、「社会に開かれた教育課程」を実現し、多様性の時代に必要な資質・能力を育む核となると考える。

(2) 学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

○校訓 スクール・ミッション

校訓である「自主 根性 聡明」の理念のもと、生命の尊厳と人権を尊重する態度やコミュニケーション能力を備え、地域を愛し、地域社会を支え、将来にわたって社会に貢献できる人材の育成を目的とする。

○スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）

- ①地域の課題に関心を持ち、課題解決に取り組むことができる生徒を育成する。
- ②コミュニケーション能力を育て、他者を大切にし、協働することができる生徒を育成する。
- ③生命の尊厳や人権を尊重し、自らを大切に生きていくことができる生徒を育成する。
- ④夢や目標に果敢に挑戦するため、意欲的に学び続ける生徒を育成する。
- ⑤伝統や地域を学び、これらを踏まえ国際理解ができる生徒を育成する。

○「地域科学探究科」取組の目的・目標

- ①地域の様々な分野で活躍する人々と交流することで、地域の課題を知り、地域住民の一人として、その解決に当たることで当事者意識を涵養する。
 - ②地域の課題を出発点として、広く国内外の諸問題に対する関心を喚起し、国際理解、異文化理解を深め、多様な価値観を認める態度を養う。
 - ③地域の中で実践的な学びを行うことで、社会性や人間性を育み、対話力やプレゼンテーション能力等のコミュニケーションに必要な能力を磨き、答えのない課題に取り組むための思考力や判断力、問題解決能力を身につける。
 - ④ICTを活用して情報収集や情報分析を行うことで情報リテラシーの向上を図り、小集団での協働学習を通してリーダーシップやチームワークを身につける。
 - ⑤既存の教科・科目では学ぶことができない自己実現のためのスキルを身につけることで、自身や社会全体の未来を創造する自信や責任感を育む。
- 以上の目的を達成するため、以下の資質・能力の育成に取り組む。

【育成を目指す8つの資質・能力】

目標設定力 (計画力)	自ら高い目標を設定し、目標実現に向けて計画を立てる。
思考力	情報を分析し、問題の原因や構造を深く考え、因果関係を整理する。
自己表現力	自分の気持ちや考え、意見を相手に伝える。
実践力・実行力	掲げた目標や解決したい課題に対して、一歩踏み出し粘り強く取り組み続ける。
協働する力	異なる世代や背景、価値観を持つメンバーとも協働して物事を進める。
当事者意識 (主体性)	身の回りの課題や所属するコミュニティに対して、常に自分事として捉える。
振り返る力 (メタ認知)	目標に照らして、自身の現状を客観的に見つめて改善する。
広い視野	異なる立場を認め、多角的な視点で物事を捉える。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、令和 4 年 3 月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとし、令和 6 年度に普通科新学科を設置する 7 校を、令和 5 年 3 月に公表した。その中で、探究的な学びを深化させるカリキュラムや学校設定科目の先進的な研究を進める県立御影高等学校と県立柏原高等学校、STEAM 探究科の学びの充実に取り組む県立篠山鳳鳴高等学校と県立姫路飾西高等学校の計 4 校が、令和 5 年度現在、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に指定されている。かねてより、管理機関として探究ルームや STEAM ルームの整備、VR ゴーグル等の機器配置を進めてきた経緯があり、令和 6 年度に向けた更なる研究・開発及び体制づくりを進める中で、県立尼崎高等学校と県立淡路三原高等学校は、普通科コースの学びにおいても先進的な取組を行っており、普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に取り組んでいることより、2 校を申請することとなった。

【事業の実施体制】

①「普通科新学科推進委員会（仮称）」の設置

- ・普通科新学科の設置及び設置を目指す高等学校（15 校程度）を構成員とする「普通科新学科推進委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
- ・定期的に研修会を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、探究活動を軸としたカリキュラムの展開等について共有
- ・本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与

②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画

- ・本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画

③本事業指定校に対する県独自の支援

- ・探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
- ・担当指導主事による継続的な指導助言

④普通科新学科に関する周知

- ・普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP 等の充実）

【事業の管理方法】

①本事業指定期間中

- ・運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
- ・「普通科新学科推進委員会（仮称）」における報告の義務化

②本事業指定終了後

- ・普通科新学科設置後の成果報告を義務化
- ・本事業終了後の人的配置の検討

(2) 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

① 運営指導委員会での検証

- ・ 大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価
- ・ 外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
- ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導

② コンソーシアムでの検証

- ・ コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
- ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
- ・ 校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価

③ 「普通科新学科推進委員会（仮称）」での検証

- ・ 普通科新学科設置校及び設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
- ・ 指導主事による各校の成果に関する相対的な評価
- ・ 探究の指導についての研修会の実施

④ 兵庫県教育基本計画に基づく検証

- ・ 「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

① スクール・ポリシーの適切な設定

- ・ 生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
- ・ 資質・能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
- ・ 入学時に期待される生徒像の明確化

② 育成するべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定

- ・ 生徒の目標に対する到達度（ポートフォリオ、ルーブリック等）
- ・ 生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
- ・ 生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度

③ 3年間を通じた体系的なカリキュラムの設定

- ・ 教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
- ・ 学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定

④ ICT 等を活用した授業設定

- ・ BYOD をはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
- ・ 急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築

⑤ コーディネーターの有効な活用方法の検証

- ・ コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
- ・ コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
- ・ コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
- ・ コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標(例)】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第3期ひょうご教育創造プラン指標】

区 分	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度 (最終目標)
目標		80.0%	81.0%	82.0%
実績（見込）	77.4%			

(3) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置検討委員会の設置

- ・普通科新学科設置に向けた委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進
- ・普通科新学科設置検討委員会は未決定の課題の検討、計画の策定及び広報を中心に活動する。部長・主任からなる校務運営委員を主たる構成員とし、必要に応じてコーディネーターや生徒等も加えた拡大委員会で組織的に活動する。

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回以上開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域NPO等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム運営委員会の開催

- ・コンソーシアム連絡会を定期的開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
- ・探究活動に関する情報やデータの提供、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学び、ICTを活用した海外との交流の機会を提供
- ・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
- ・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
- ・普通科専門学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
- ・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県SSH指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
- ・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

〔管理機関における研究開発の実績〕

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神戸長田 尼崎小田 宝塚北 三田祥雲館 明石北 加古川東 小野 姫路西 姫路東 龍野 豊岡	平成 16～令和 7 年度 令和 4～令和 8 年度 平成 17～令和 7 年度 令和元～令和 5 年度 平成 21～令和 8 年度 平成 22～令和 6 年度 平成 18～令和 8 年度 令和元～令和 5 年度 令和 2～令和 6 年度 令和 2～令和 6 年度 平成 25～令和 9 年度 平成 18～令和 8 年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫路西 兵庫庫 伊丹 国際	平成 26～平成 30 年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
兵庫生野 柏原 佐用 村岡	令和 2～4 年度 令和元～3 年度 令和元～3 年度 令和 2～4 年度 令和 2～4 年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。
御影 柏原 篠山鳳鳴 姫路飾西	令和 4～6 年度 令和 4～6 年度 令和 5～7 年度 令和 5～7 年度		新時代に対応した高等学校改革推進事業 学際領域学科又は地域社会学科等の設置に向けてのカリキュラム開発や実施体制の開発等、普通科改革の実現に資する先進的な取組を行う。

〔申請校（兵庫県立尼崎高等学校）における研究開発の実績〕

〔国事業〕

- 平成 30～令和元年度（２年間）
文部科学省「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究事業」指定校

〔県事業〕

- 令和 4～令和 5 年度
「兵庫県版学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」試行校
- 令和 6 年度
「兵庫県版学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」実施校
- 令和 4 年度
「高等学校における食育推進事業」研究指定校

〔その他〕

- 令和 5 年度
（一財）日本新聞協会「2023 年度 N I E」実践指定校

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
関西大学教育推進部 副部長/教授	山田 剛史	課題解決型学習（PBL）に専門的知識を有する
関西国際大学副学長	濱名 陽子	家庭教育・幼児教育の社会学に専門的知識を有する
京都産業大学総合生命科学部 生命システム学科教授	佐藤 賢一	質問駆動型学習に専門的知識を有する
三重大学教育学部教授	石川 照子	市民性教育に専門的知識を有する
神戸大学附属中等教育学校校長	齋木 俊城	高大連係型探究活動に専門的知識を有する
株式会社アンド代表取締役	小野 義直	共創探究に専門的知識を有する
兵庫県立高等学校元校長	正岡 茂明	学校教育及び地域史に専門的知識を有する
尼崎市立中央図書館館長	安福 眞理子	図書活用活動に専門的知識を有する
兵庫県教育委員会高校教育課長	倉橋 良太	管理機関

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

年間3回程度運営指導委員会を開催し、各委員の専門性を生かして、令和6年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発と評価方法、コーディネーターを中心とした校内組織の整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報活動等について支援と助言を行う。令和7・8年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、実施カリキュラムの評価や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。また、本校が「地域科学探究教育」の推進校となり、県内高校への普及に寄与するための発表会や研修会等を行う際の支援や助言を行う。

4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

- (1) 学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）※教育課程表は添付資料として提出すること。

各学年において、学校設定科目「尼ゼミⅠ～Ⅲ」を新学科のコア科目として位置づけ、普通科と共通内容の「セルフ＝ナビⅠ～Ⅲ（総合的な探究の時間）」で身につけた資質・能力と関連づけて、より大きな成果が得られるよう計画する。また、地域貢献に繋がる既存コースから引き継いだ環境教育活動や、地域と連携した異世代間交流である「インターピープル」を体験活動とすると同時に、探究活動に関連する選択科目を多く設定することで、実体験に基づいた課題設定、生徒の興味関心に応じて、探究的な学びが深まるプログラムを実施する。

【1年生】 学校設定科目「尼ゼミⅠ」（2単位）

- 1学期 探究活動に必要な基礎的スキルの習得。
 - ・コンソーシアムの自治体・地元企業・大学等の方々を講師として招き講義を受ける。
- 2学期「尼崎を知り、尼崎と動く」をテーマに地域のことを学ぶ
 - ・図書館・公民館等を利用して調べ学習やフィールドワーク、体験学習、地域との協働学習（イベント参加も含む）を行う。
- 3学期 1年間の集大成
 - ・活動成果の報告会を実施し、先輩からの助言を受ける。
- 特別活動 地域異世代間交流行事「インターピープル」等

【2年生】 学校設定科目「尼ゼミⅡ」（2単位）

- 1、2学期 「尼崎を動かす」をテーマに地域課題の解決を探究する。
 - ・興味関心があることからテーマ（問い）を設定し、地域での探究活動を行う。
 - ・グループで分野別に地域課題研究⇒グループで発表⇒個人での地域課題研究に深化させる⇒個人で論文作成
 - ・個人で地域課題研究⇒個人で発表⇒論文作成
- 3学期 1年間の振り返り 中間発表会の実施
- 選択科目 「尼崎学」（2単位） ※学校設定科目
 - ・自分たちが住む尼崎がどのようなまちであるかを学び、地域とどのように関わっていくかを探究していく。
 - ・授業内の発表だけでなく、地域に向けても実践を発表する。
- 特別活動 尼崎の森での環境教育活動等

【3年生】 学校設定科目「尼ゼミⅢ」（2単位）

- 1学期 論文作成・発表準備
- 2・3学期 発表（ポスターセッション）、下級生の指導、3年間のまとめ・振り返り
- 選択科目「コミュニケーション」（2単位） ※学校設定科目
 - ・手話やコミュニティ・ダンス等の体験活動、スピーチやエッセイライティング、プレゼンテーションの演習を通して、情報を発信する力（メディア活用能力含む）と自分の意見を他者に伝える力を身につける。対話を重視した協働的な学びを展開。

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

令和4年度から「兵庫県版学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」試行校の指定を受け2年が経過した。本校では尼崎市全体を基盤地域と捉え、尼崎市（行政）、尼崎商工会議所、関西国際大学、地元自治会等、各機関の代表者に委員を委嘱している。

「学校運営協議会」では、組織の実効性を伴わせるために、委員と教職員の会議での意見交換で終わらせず、実際に生徒が地域に出て、探究を行っている場面でも、委員が指導をする取組を進めた。その結果、探究の学びが自走し始めている（例、学校設定科目「尼崎学」）。具体的には、生徒自身が市の事業内容を調べ、活動発表の場や協力機関、またその活動を実現できる金額が補助される事業を探している。

令和6年度は、「学校運営協議会」を「コンソーシアム委員会」へ移行し、協力体制を継続・発展させていく。地域との連携を継続しつつ、新しい形で地域と繋がりながら探究活動を展開し、新学科の設置へと繋げていく。

新学科では、生徒が興味ある課題に対して探究を実施することを持続可能な取組として継続させていくため、今まで構築してきた地域や卒業生との繋がりを活かした協働体制をさらに強固なものとして、有効なコンソーシアムの構築を目指す。

【目的・目標】

地域に根差した教育活動が円滑に実施できるよう、コンソーシアムを活用して地域資源（人・モノ・カネ・情報）へ協力や支援を求める。また、カリキュラムや探究活動についても、コンソーシアム委員会において情報交換をし、助言をいただき、地域の様々な資源と繋がる魅力的なカリキュラムづくりを目指す。新学科においても魅力的な学びを展開することで、学校・生徒・保護者・地域が、それぞれの満足度を向上させていく。コンソーシアムを核に学校と地域が一体となり、地域ニーズを反映した選ばれる学校づくりを目指す。

(3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
関西国際大学国際コミュニケーション学部観光学科准教授/ 高大連携室長	前田 哲男	令和5年度本校「学校運営協議会」 会長
尼崎商工会議所産業部地域振興 グループ課長	養田 茂雄	令和5年度本校「学校運営協議会」 委員
尼崎市総合政策局中央地域振興 センター中央地域課課長	津田 江美	令和5年度本校「学校運営協議会」 委員
尼崎市中央地区大物第八社会 福祉協会会長	森 弘	令和5年度本校「学校運営協議会」 委員
株式会社JTB神戸支店教育 営業第一課課長	藤田 真吾	令和5年度、(一社)あまがさき観光局 との協働事業の計画
三和本通商店街振興組合理事長	藤本 一彦	令和5年度、学校設定科目「尼崎学」 に協力

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
尼崎市立大庄中学校学校評議員、尼崎市民生委員・児童委員	松永 和子
四天王寺大学教育学部 1 回生（本校卒業生）	守本 龍人
本校非常勤講師（数学）	林 保典

※必要に応じて行を追加すること。

当該者の主な実績

- (A) 松永 和子 氏 令和 4 年度本校 P T A 副会長。尼崎市民生委員・児童委員 主任児童委員。
- (B) 守本 龍人 氏 四天王寺大学教育学部 1 回生。令和 5 年度本校「教育と絆コース」卒業生。令和 4 年度生徒会長として、「全国防災ジュニアリーダー育成合宿」や「兵庫県スマホサミット」に参加。
- (C) 林 保典 氏 本校非常勤講師（数学）。令和 5 年度本校「学校運営協議会」に記録者として参加。

※ 7 行以内で記載すること

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

以下の内容にコーディネーター 3 名が連携して取り組む。（A～C の記号は、主として活動するコーディネーターを示す。）

【1 年目】 学校と地域社会の協働体制づくり

- ・学校と地域の様々な人や組織を繋ぐ高校魅力化を推進する協働体制の構築（A）
- ・多様な人の思いを繋ぐビジョンの共創（A・B・C）
- ・学校と地域の協働による事業計画の策定（A）
- ・事業推進のための協議会等の運営（A・C）

【2 年目】（地域科学探究科 1 年目）

(1) 社会資源を活用した地域協働の基盤づくり

- ・大学・民間企業等との提携、専門知や技術・サービスの活用（A・B・C）
- ・インターンシップやボランティア、外部専門家等の外部人材の確保（A・B・C）
- ・活動助成金等の外部資金の情報収集と獲得（A・C）
- ・他地域との連携・協働、国や都道府県との折衝（A）

(2) 新たな人の流れと多様性ある教育環境づくり

- ・卒業した生徒と学校や地域を繋ぐ、成長・貢献機会の提供等（A・B・C）

(3) 地域社会での学習機会づくり

- ・学校教育と社会教育の間を繋ぐ、放課後や休日の学び場等の環境整備や企画・調整（A・B）
- ・生徒と学校外の様々な学習機会を繋ぐ地域活動・社会体験等の調整・支援（A・B・C）

【3 年目】（地域科学探究科 2 年目） 地域社会に開かれたカリキュラムづくり

- ・地域社会と教育課程さらに教科間を繋ぐカリキュラムデザインや、授業・部活動・生徒会等の地域での活動と学びを繋ぐ課題解決型学習の企画・実施支援（A・B・C）

※勤務形態 令和 6 年度は、3 名とも非常勤とする（変則勤務形態）。

(5) 学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

令和7年度、普通科新学科「地域科学探究科」設置のため、以下の広報活動を実施する。
広報先は、中学生・中学生保護者・地域住民・尼崎市役所（行政）・市内企業等。

また、外部関係機関については、新学科の教育活動に協力いただく依頼も含む。

①「地域科学探究科」に関するチラシ、パンフレット、ポスターの作成・配布

- ・トライやるウィーク実習に参加した中学生、生徒、教員が協働し、広報について考える。
- ・地域関係者等からアイデアを募り、「地域科学探究科」の魅力を伝えるチラシを作成する（コースから新学科への変更、カリキュラムの内容等）。
- ・チラシの配布は、尼崎市内の中学校3年生及び中学校教員・地域外部関係機関・企業等。
- ・ポスターは、学区内の駅やスーパー、生涯学習プラザ等尼崎市内の各所に掲示する。
- ・チラシ配布及びポスター掲示の依頼にあたっては、本校生と本校職員がチラシやポスターを人から人へ渡すことを基本とし、思いを伝えながら広報を進める。

②学校ブログ、SNS（Instagram）等による情報発信

- ・令和7年度を目途に、学校のホームページの刷新及び、スマートフォン向けサイトの新設を実施する。
- ・SNS（Instagram）等を活用し、学校全体の魅力ある教育活動を高校生の目線で発信する。

③オープン・ハイスクールなど（中学生・保護者・地域等への広報）

5月	新学科「地域科学探究科」説明会
6月	尼崎市内公立高等学校合同説明会
7月	第1回オープン・ハイスクール/新学科「地域科学探究科」説明会
9月	第2回オープン・ハイスクール
11月	第3回オープン・ハイスクール

④学校関係者への説明

4月	尼崎市内中学校へ教員向け資料配布、高大連携協定校への説明
5・6月	P T A総会での説明、市内行政機関各種会議にて説明、地域への説明
7・8月	学校評議員会・学校運営協議会・尼崎市内各種団体への説明及び協力依頼

⑤授業成果発表会を通じて情報の発信

中学生・保護者・中学校教員・行政・企業・地域の方々等広く広報を行い、生徒の探究の成果を知ってもらう（関係校、地域、保護者にも公開）。

⑥マスコミへの取材依頼

探究の取組の一つとして、活動生徒がマスコミ各社に取材依頼を行う。

5 実施計画

(1) 3ヶ年の実施計画の概要

1 年目（「地域科学探究科」設置準備）

新学科の目標を確認しながら「何を学ぶか」、そして主体的・対話的で深い学びの実現のために尼崎市のフィールドで「どのように学ぶか」を共有しつつ、新設する校内組織である「普通科新学科設置検討委員会」で本学科での具体的な学習の取組内容を検討し、新学科カリキュラム開発を更に進めていく。

核となる内容については、「運営指導委員会」での指導・助言をもとに「普通科新学科設置検討委員会」で見直しを行い、「教育と絆コース委員会」や「教育課程委員会」とも連携して具体的な学習内容を固めていく。

年間計画及び学習展開内容（活動場所）について、「校務運営委員会」「職員会議」で本校教職員へ内容等を周知していく。また、「職員研修会」と並行して「コンソーシアム委員会」（学校運営協議会）を実施し、教育環境を整えていく。こうした取組を「学校評議員会」「運営指導委員会」で説明し、意見や助言を受け、R－P D C Aサイクルで検証しながら進めていく。

- ・入学者選抜の検討
- ・市内関係機関との連携協力のもと、学科の特色ある学びの先行実施（尼崎学）
- ・他校生との探究会議を実施するためのネットワークの構築（先進校に学ぶ）
- ・探究学習の年間計画策定及びルーブリック・評価規準作成
- ・中学生及び保護者等へ広報活動
- ・特色ある授業成果発表会（仮称）

2 年目（「地域科学探究科」設置 1 年目）

- ・新学科カリキュラム開発
- ・探究学習の年間計画策定及びルーブリック・評価規準作成
- ・魅力ある学びの先行実施
- ・連携強化（高大連携の強化及び内容の見直し）
- ・校内組織体制の強化
- ・探究成果発表会（仮称）
- ・他校生との探究会議（地域探究の同じ課題に取り組んでいる他校生とのネットワークの構築、交流開始）
- ・広報活動

3 年目（「地域科学探究科」設置 2 年目）

- ・関係機関の連携協力による教育活動実施
- ・新カリキュラム実施に向けた校内体制の見直し
- ・各教育活動ルーブリック・評価規準の検証・見直し・各教育活動への反映
- ・地域資源を活用した「尼ゼミⅠ・Ⅱ」の充実
- ・地域と連携した特別活動・課外活動の計画・実施
- ・他校生との探究会議によるネットワーク参加校における協働活動の推進
- ・地域・学校活性化に向けた2年間の生徒支援の検証等による総括、次年度以降の計画策定

(2) 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	・探究学習ガイダンス ・普通科新学科設置検討委員会の発足 ・2年コース大学生との交流会	教員志望の神戸大学生
5月	・2年コース保育実習 ・新学校設定科目「尼ゼミⅠ」研究 ・公開授業週間（探究的な学びの研究） ・新学科「地域科学探究科」説明会	関係保育園・こども園 保護者・地域・大学 関係中学校・保護者
6月	・尼崎市内公立高等学校合同説明会 ・コーディネーターによるキャリア教育講座（探究の社会的価値の理解） ・1年コース市職員による講義（地域課題）	関係中学校、教育委員会等 コーディネーター 尼崎市
7月	・1・2年コース第1回尼崎の森環境教育活動 ・1年コース大学訪問・講義① ・第1回オープン・ハイスクール ・新学科「地域科学探究科」説明会 ・第1回コンソーシアム委員会（学校運営協議会） ・職員研修会① ・第1回学校評議員会 ・第1回運営指導委員会	兵庫県阪神南県民センター 関西大学 関係中学校、地域、教育委員会等 関係中学校・保護者 コンソーシアム委員（学校運営協議会委員） 大学教授等 学校評議員 運営指導委員
8月	・先進校視察 ・四者懇談会 ・「アントレプレナーシップ」学習 ・職員研修会② ・コーディネーター研修①（東京）	長崎県立松浦高等学校 生徒会、保護者、教職員、自治会 尼崎商工会議所、企業 大学教授等 （一財）地域・教育魅力化プラットフォーム
9月	・第2回オープン・ハイスクール ・3年コース放課後こどもクラブ実習 ・新学科特講① ・指定校発表会（東京） ・授業助言①	関係中学校、地域、教育委員会等 関係小学校 大学教授 大学教授

10月	・1年コース尼崎の森「森のフェスタ」実習 ・2年コース小学校授業実習前中間発表会（1・3年コース生も参加） ・第2回運営指導委員会 ・コーディネーター研修②（東京） ・授業助言②	兵庫県阪神南県民センター 運営指導委員 （一財）地域・教育魅力化プラットフォーム 大学教授
11月	・公開授業週間 ・2年コース小学校授業実習 ・第3回オープン・ハイスクール ・1年コース大学訪問・講義② ・授業助言③	保護者・地域・大学 関係小学校 関係中学校、地域、教育委員会等 関西大学 大学准教授
12月	・職員研修会③ ・第2回コンソーシアム委員会（学校運営協議会） ・授業助言④	大学教授等 コンソーシアム委員（学校運営協議会委員） 大学准教授
1月	・特色ある授業成果発表会（仮称） ・新学科特講② ・第3回運営指導委員会 ・授業助言⑤	地元 NPO、大学、企業、尼崎市、関係中学校、高校、同窓会、企業等 大学教授 運営指導委員 大学准教授
2月	・第2回学校評議員会 ・コース（一部）兵庫県立高等学校探究活動発表会（神戸） ・コーディネーター研修③（東京） / 全国フォーラム（東京） ・授業助言⑥	学校評議員 大学、高校、教育委員会 （一財）地域・教育魅力化プラットフォーム、文部科学省 大学准教授
3月	・1年コース「インターピープル」 ・2年コース第2回尼崎の森環境教育活動 ・1年コース「先進校に学ぶ」文部科学省令和4～6年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業」指定校との交流 ・第3回コンソーシアム委員会（学校運営協議会） ・進路学習・職業人を招いての講演会 ・関係機関意見交換会 ・職員研修会④	福祉施設、大学、企業、尼崎市、関係中学校、高校 兵庫県阪神南県民センター 兵庫県立柏原高等学校 コンソーシアム委員（学校運営協議会委員） 大学教授、企業等 コーディネーター、関係中学校、地域、尼崎市、企業、保護者 大学教授等

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

「運営指導委員会」「コンソーシアム委員会」において事業の進捗状況を確認する。各委員会での意見をもとに推進していく点、見直しが必要な取組等改善策を検討していく。状況を可視化し、学習者・指導者・支援者がわかりやすい分析に努める。

この評価システムは、出来・不出来を見るのではなく、魅力を活かすためのアセスメント（診断）と捉える。よって、学習者・指導者・支援者等が客観的に自らのありようを知る手段として「評価」を活用する。

①生徒の成長を指標化する（視点）

以下の力について、ルーブリックを開発、活用することで評価（アセスメント）する。評価することによって、強み・伸び代を把握することができる。

主体性	自ら課題を設定し、意志をもって（粘り強く）挑戦・行動する姿勢
協働性	多様な人と協働し、新たな価値の創造に向かう姿勢
探究性	未来（よりよい人生と社会）づくりに向け、学び成長しようとする姿勢
社会性	地域や社会の課題を自分事として捉え、積極的に貢献しようとする姿勢

②大人のあり方を指標化する（教員の資質向上・学外支援者のあり方）

大人（教員・支援者等）のあり方は、学校・地域の学びの土壌を豊かにしていくために重要である。「学び」は、子供も大人も相似形であるため「大人向け調査」も試行的に実施する。そして、大人の率先垂範による土壌づくりへの寄与に関する自己評価と、生徒による土壌評価を比較することを試みる。最終的には、教師の役割を知識の教授者から、生徒の学びの伴走者に変えていくことが目標である。

③外部機関との連携

②の調査結果に基づいて、「行動及びプログラムの改善に繋げる手段」を本学科の魅力化に関わる学校内外の関係者（各種委員会等）で共有、検討する。

また、「運営指導委員会」「コーディネーター」「コンソーシアム」等、それぞれの組織が持続可能な形で進められるよう計画的に実施する。

④中学生、保護者への視点

生徒は、ＩＣＴも積極的に活用しそれぞれの学力や学習スタイル、目標などに応じて主体的に学びを進める。また、様々な対話や教科横断的な探究活動等に取り組むことで知識・技能の習得と活用を往還し、学力を伸ばしていく。学校教育活動全体を通して生徒の活動を評価し、家庭とも情報共有を密に行う。

⑤カリキュラムマネジメントの視点

上記調査結果等から読み取れる本校生の意識・行動、また学びの環境や大人のあり方の特徴・実態を把握する。その結果から教育課程及び学校行事等を見直し、新学科の検討を進める。

6 成果の普及のための仕組み

① 中学校への普及

- ・オープン・ハイスクールや学校説明会等で生徒がファシリテーターとなって、探究活動を紹介し、模擬授業形式で中学生に体験させる。また、中学生の保護者にも同時に見学機会を設ける。
- ・本校生が自分の近況報告を兼ねて出身中学校に訪問する。チラシ・ポスターを持参して新学科を紹介する。

② 校内での情報共有

- ・大人（教員および学外支援者）が新学科のミッションを理解し、探究に対して同じベクトルで進むことができるよう、研修等を通して共通理解に努める。
- ・生徒が、主体的に学ぶことができるようICT機器を活用し、協働的な学びを深められる環境づくりに努める。その際、様々な形で成果発表を行い、全校生徒へ情報を共有する。

③ 校外への発信

- ・探究成果発表会（仮称）等を開催し、外部の方々へ取組内容等の情報を発信する。
- ・ホームページやSNS（Instagram）等で発信する。
- ・県教育委員会主催の各種研修会での先行事例として発表・報告する。
- ・本校学校行事「インターピープル（地域異世代交流行事）」で世代を超えた地域の人々との交流を図り、新たな地域行事の協働開催を検討する。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

SDGs 実現に向けた人材育成推進に関する連携協定を尼崎市と締結し、地域（尼崎市）とともに未来を創る学びの具体化に向けた取組を進める予定である。また、本事業の活動内容を継続して推進する組織体制づくりを運営指導委員会の指導・助言を受けながら構築していく。「探究」をキーワードに多様な視点を融合させる形で、本校の独自の学び方を構築する。

1 コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

国の事業指定期間内に確立した学校内外での組織・関係を引き続き活用し、更なる連携・協働を発展させる。

- ① 想いを共有する意志ある仲間（チーム）づくり
- ② 多様な主体による共同体制（コンソーシアム）づくり
- ③ 共に作りたい未来の姿（ビジョン）づくり
- ④ 計画・実行・評価・改善の仕組み（PDCAサイクル）づくり

2 コーディネーター機能の維持

教員のコーディネーター機能の移行やコーディネーター加配に関する予算の確保等の課題に対し、望ましいあり方について指定期間内に検討する。

3 取組を継続するためにかかる費用を確保する仕組み

県独自の関連事業に積極的に応募・申請するとともに、コーディネーターの人件費や行事におけるバス借り上げに係る費用等は、従前のPTA「教育活動振興会費」等を活用できるよう、引き続き保護者に理解と協力を求めている。

Ⅱ 事業結果説明

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程(令和6年6月7日～令和7年3月31日)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施												
カリキュラム開発会議					●	●	●	●	●	●	●	●
外部講師による講座・研修					●	●			●			
関係機関との連携協力体制の構築・維持												
運営指導委員会					●		●			●		
コンソーシアム会議						●			●			●
先進校視察					●			●				
コーディネーター												
コーディネーター（松永氏）				●	●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（林氏）					●	●	●	●	●	●	●	●
コーディネーター（守本氏）							●				●	●
新学科設置に向けた説明会等の実施												
新学科説明会、オープン・ハイスクール、 高校合同説明会			●	●		●		●				
成果発表・成果普及												
成果発表会										●	●	
連携高校との交流会											●	●
成果検証												

(2) 事業の実績の説明

① カリキュラムの検討内容

文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、まず、昨年度学校構想委員会が策定した普通科新学科「地域科学探究科」のスクール・ポリシー案を校務運営委員から成る普通科新学科設置委員会で審議し、職員会議において「地域科学探究科」独自のスクール・ポリシーとして決定した。

初年度にあたる今年度は、普通科新学科の開設前年にあたるため、既存の教育と絆コースの生徒を普通科新学科の生徒に見立てて事業を進めた。現行コースの教育活動の中から新たに設置される普通科新学科に継承すべき活動の精査を行い、さらに普通科新学科の教育課程において核となる学校設定科目「尼ゼミⅠ」「尼ゼミⅡ」「尼ゼミⅢ」および3年間の「総合的な探究の時間」の内容について、事業推進担当部署として今年度新設した特色教育推進部のメンバーを中心とする担当者会議で定期的に検討を行った。

結果、学校設定科目と総合的な探究の時間の3年間を見通した計画、学校設定科目「尼ゼミⅠ」と第1学年における普通科クラスと共通の「総合的な探究の時間」の年間計画を策定した。

年度末まで定期的に担当者会議を継続し、次年度実施の「尼ゼミⅠ」と「総合的な探究の時間」の評価方法についても決定する。

次年度は、開設された普通科新学科において今年度定めた計画内容の検証を行いながら普通科新学科独自の行事としての校外での研修、地域イベントへの関り方などについても実施に向けて検討していく。

【本校スクール・ミッションと「地域科学探究科」のスクール・ポリシー】

本校のスクール・ミッション 「自主 根性 聡明」の理念のもと、生命の尊厳と人権を尊重する態度やコミュニケーション能力を備え、地域を愛し、地域社会を支え、将来にわたって社会に貢献できる人材を育成する。	
新学科のスクール・ポリシー	育成をめざす資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー） ① 自ら設定した課題の解決に向けた活動を通して、課題解決能力やチャレンジ精神、失敗を恐れない心を育成する。 ② 探究活動を通して、地域の市民、企業、施設と積極的に関わり、協働する精神を育成する。 ③ コミュニケーション能力や社会に対する問題意識、問題解決能力などを養い、地域社会や国際社会でも活躍できる生徒を育成する。
	教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー） ① 基礎的・基本的な学力を身に付けるため、主体的・対話的で深い学びを中心とした授業を展開する。 ② 地域と連携し、地域資源や地域課題を活用した探究活動を展開する。 ③ 生徒の進路希望に応じたコース及び選択科目を設定する。

	入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー） ① 地域の課題に関心を持ち、意欲的に課題解決に向けて取り組むことができる生徒を募集する。 ② 他者との対話や協働を通じて、思考をより発展させる意欲のある生徒を募集する。 ③ 高い好奇心と探究心を持ち、学び続けることができる生徒を募集する。
--	---

【外部人材を講師とした講義・職員研修会等】

実施内容	実施日	講 師
職員研修会	8月26日	関西大学教授 山田 剛史 氏
特別講義（関西大学）	9月12日	関西大学教授 山田 剛史 氏
職員研修会	12月 4日	兵庫県立夢野台高等学校教諭 田畑 北斗 氏

本校においては生徒も教職員も探究活動に関する知識・技能（指導技術）の修得が不十分であると考えている。専門的知見を有する運営指導の委員や過去に本校での地域連携を重視した探究活動を指導した経験を有する本校元教員による講義は大変効果的であった。生徒にとっても特別講義を受講することで探究活動を行うことへの理解を深めることができた。

初年度ということもあり、計画段階では多くの外部講師による特別講義や授業指導等を予算化していたが、実際は他の学校行事日程との調整が難しかったり、講師の選定するにあたり各課題に対して最適の講師の情報を得られてなかったりしたため、計画どおりに進めることができなかった。

次年度に向けては、学校行事全体の予定をにらみながら、適切な時期に適切な回数の職員研修会や生徒向け特別講義等を計画していく。

【指定校間の交流】

今年度の重点的な取組として県の内外を問わず、事業指定を受けている学校との交流を積極的に行ってきた。これは事業実施の成果をより高めることに繋がっていると考えているからである。

次年度についても、さらに指定校との交流を積極的に進め、特に生徒間交流を本校普通科新学科の特色ある教育活動として定着させていきたい。

取 組	実施日	関係校
学校訪問（教員）	8月28日	長崎県立松浦高等学校
学校訪問、探究の授業見学（教員）	11月11日	兵庫県立御影高等学校
公開授業参加（教員）	11月22日	京都市立開建高等学校
学校訪問受け入れ（教員）	12月 6日	長崎県立松浦高等学校
相手校発表会参加、発表（生徒）	2月 1日	伊丹市立伊丹高等学校
相手校発表会参加、質問（生徒）	3月 6日	兵庫県立柏原高等学校

② 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

【事業の実施体制】

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化した。
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実させた。
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報（カリキュラム開発および事業進捗状況、先進校訪問報告等）を共有化した。

②普通科新学科設置検討委員会と担当学会議の設置

- ・部長・主任から成る校務運営委員を主たる構成員とする普通科新学科設置検討委員会は未決定の課題の検討、計画の策定及び広報を中心に活動する組織として設置したが、未決定の課題の検討、計画の策定については、特色教育推進部を中心とする担当学会議を年度途中に設置し、原案作成を機動的に行った。必要に応じてコーディネーターや生徒等も加えた拡大委員会を開く計画であった。しかし、各事業実施にあたって個別に意見聴取は行ったものの拡大委員会として組織的な活動を行うまでには至らなかった点が課題である。

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回開催し、専門的な知見を有する大学関係者、企業関係者、自治体関係者等の委員から助言を受けた。

④コンソーシアム委員会の開催

- ・コンソーシアム委員会を年間3回開催し、カリキュラムについての各専門分野の立場から必要な助言と協働連携事業の提案を受けた。

【事業の管理方法】

①運営指導委員会での報告

- ・本事業で実施した教育活動について進行管理、評価、指導を受けた。
- ・委員会の構成員でもある県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言を受けた。

②コンソーシアム委員会での報告

- ・本事業で実施した教育活動や本校が提案する地域協働について評価、指導を受けた。

③ 運営指導委員会の体制および取組

所 属	氏 名	主な実績
関西大学教育推進部 副部長/教授	山田 剛史	課題解決型学習（PBL）に専門的知識を有する
関西国際大学副学長	濱名 陽子	家庭教育・幼児教育の社会学に専門的知識を有する
京都産業大学生命科学部 産業生命科学科教授	佐藤 賢一	質問駆動型学習に専門的知識を有する
三重大学教育学部教授	石川 照子	市民性教育に専門的知識を有する

神戸大学附属中等教育学校校長	齋木 俊城	高大連携型探究活動に専門的知識を有する
株式会社アンド代表取締役	小野 義直	共創探究に専門的知識を有する
兵庫県立高等学校元校長	正岡 茂明	学校教育及び地域史に専門的知識を有する
尼崎市立中央図書館館長	安福 眞理子	図書活用活動に専門的知識を有する
兵庫県教育委員会高校教育課長	倉橋 良太	管理機関

今年度は、年間３回の運営指導委員会を開催した。各委員の専門性を生かして、新学科設置に向けたカリキュラム開発と評価方法、コーディネーターを中心とした校内組織の整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報活動等について支援と助言を受けた。

	開催日	内 容
第１回	８月２６日	令和６年度文部科学省「普通科改革支援事業」と本校における今年度の計画
第２回	１０月３１日 ６限小学校実習模擬授業参観後開催	(1) ２年教育と絆コース生による小学校実習模擬授業について (2) 令和６年度上半期の取組について (3) 令和７年度地域科学探究科カリキュラムについて
第３回	１月３０日 授業成果発表会参観後開催	(1) １年生授業成果発表会参観 (2) 次年度「総合的な探究の時間」全体計画について

④ コンソーシアムの体制および取組

所 属	氏 名	主な実績
関西国際大学国際コミュニケーション学部観光学科准教授/ 高大連携室長	前田 哲男	令和５年度本校「学校運営協議会」会長
尼崎商工会議所産業部地域振興グループ課長	養田 茂雄	令和５年度本校「学校運営協議会」委員
尼崎市総合政策局中央地域振興センター中央地域課課長	津田 江美	令和５年度本校「学校運営協議会」委員
尼崎市中心地区大物第八社会福祉協会会長	森 弘	令和５年度本校「学校運営協議会」委員
株式会社ＪＴＢ神戸支店教育旅行センター教育営業第一課課長	藤田 真吾	令和５年度、(一社)あまがさき観光局との協働事業の計画

地域に根差した教育活動が円滑に実施できるよう、コンソーシアムを活用して地域資源（人・モノ・カネ・情報）へ協力や支援を求めた。また、カリキュラムや探究活動についてもコンソーシアム委員会において情報交換をし、地域の様々な資源と繋がる魅力的なカリキュラムづくりへの助言をいただいた。

	開催日	内 容
第１回	９月３０日	令和６年度文部科学省「普通科改革支援事業」と本校における今年度の計画

		る今年度の計画
第2回	12月24日	(1) 令和6年度上半期の取組について (2) 令和7年度地域科学探究科カリキュラムについて (3) 地域連携・地域協働の在り方について
第3回	3月予定	(1) 令和7年度「尼ゼミⅠ」における地域連携・地域協働について (2) 地域イベントへの参画について

⑤ コーディネーターの配置および活動内容

	所属	氏名
A	尼崎市立大庄中学校評議員、尼崎市民生委員・児童委員	松永 和子
B	四天王寺大学教育学部1回生（本校卒業生）	守本 龍人
C	本校非常勤講師（数学）	林 保典

事業初年度のコーディネーター3名には本校職員とコンソーシアム等、地域の各団体との関係づくり・協働体制づくりと指定事業の円滑な実施に寄与することを期待して委嘱した。各コーディネーターの役割を明確にし、分担と協働によって総じて成果があがることをねらいとした。すべての役割に関わっているコーディネーターAが中心的にコーディネーターの活動を行った。

【役割分担】

- ・学校と地域の様々な人や組織を繋ぐ高校魅力化を推進する協働体制の構築（A）
- ・多様な人の思いを繋ぐビジョンの共創（A・B・C）
- ・学校と地域の協働による事業計画の策定（A）
- ・事業推進のための協議会等の運営（A・C）

指定事業であることから、敢えて意図して選定・委嘱した面もあるが、いずれのコーディネーターも地域連携のコーディネーターとしての経験を有しない。本校としてはコーディネーターの育成もねらいとしており、生徒の活動、各種会議、学校・新学科説明会、学校訪問、職員研修会等に教員と共に行動し参加する機会を意識的に多く設けた。

結果、各コーディネーターがコーディネーターとして果たすべき役割と指定事業内容の理解を深めることができ、指定事業の円滑な実施の一助となった。但し、本校職員や地域の各団体と学校との関係づくりに留まった感是否めず、学校と地域の協働による具体的な事業計画の策定にまでは至らなかった点が次年度に向けての課題である。

⑥ 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

【新学科の設置及び設置に向けた検討状況】

原則毎週金曜日の2限、担当部署である特色教育推進部のメンバーを中心に管理職も出席する担

当者会議を開催し、新学科の設置に向けたカリキュラムや新学科の特色ある教育活動について検討を行って原案を作成し、校務運営委員からなる普通科新学科設置委員会で審議し、職員会議において決定して職員間の共通理解を図った。

【関係者への説明の実施状況】

- ・普通科新学科説明会開催のお知らせ（Ａ４版、両面刷り）の作成と市内中学校への配布
- ・普通科新学科「地域科学探究科」のパンフレット（Ａ４版、三つ折り６ページ）の作成
- ・普通科新学科説明会およびオープン・ハイスクールの複数日開催
- ・尼崎市内公立高等学校合同説明会での説明
- ・本校ホームページでの広報

説明会	実施日	備考
教員による中学校訪問・説明	４月下旬	
普通科新学科説明会	５月１８日 ７月１３日 ７月２３日	・生徒による学校設定科目「尼崎学」（モデル科目）探究活動実践プレゼンテーション ・模擬授業（協働作業：ペーパータワーづくり）
尼崎市内公立高等学校合同説明会	６月１５日	
第１回オープン・ハイスクール	７月１３日、７月２３日	
第２回オープン・ハイスクール	９月２８日	・模擬授業（尼崎市開発カードゲーム「ＡＴＴＦ（アマガサキトゥザフューチャー）Ⅱ」を使用した尼崎の魅力発見・課題解決）
第３回オープン・ハイスクール	１１月１６日	

次年度は本校のホームページ上に本指定事業や普通科新学科の魅力・特色ある教育活動を発信するコーナーを特設し、中学生や保護者が普通科新学科への理解が深まるよう広報活動を強化していく。インスタグラム等のＳＮＳの活用については広報効果が大きいことを感じているが実際活用する際は慎重に進めていきたい。

⑦ 管理機関における事業全体の成果検証、評価

運営指導委員会開催の度に担当指導主事から継続的な評価および指導があった。また各運営指導委員からもそれぞれが有する専門的な視点からの継続的な評価や助言をいただいた。

各コンソーシアム委員会においても、担当指導主事が出席して継続的な関与および助言があった。コンソーシアムを構成する各委員からは、本校提案の地域連携・地域協働の在り方に関する建設的な意見を多数いただいた。次年度から始まる普通科新学科での取組に生かしていく。

⑧ 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

本校が指定事業を受託するに伴い、管理機関である県教育委員会からは令和7年度の普通科新学科開設に向けた支援として、400万円が予算化され、旧コンピュータ室Cを改装して効果的な探究活動を行う場としての「探究ルーム」が整備された。本格的な使用は、普通科新学科が開設される次年度となるが、今年度は中学生と保護者を対象にした普通科新学科説明会やオープン・ハイスクールで見学の機会を設け、第2回オープン・ハイスクールでは中学生への模擬授業の場として使用し、広報の一助となった。また各教科やLHRにおける探究活動の場としても使用している。

人員の配置については、次年度2名の教員加配が計画されており、実現すれば担当部署である特色教育推進部の人員を増すことができ、さらなる事業推進の大きな支援となる。

⑨ 成果普及のため取組

体験を重視する現行のコースの各教育活動において、外部講師による探究活動の意義を説く講義を実施し、本校以外の会場で発表を行う機会を積極的に増やした。その成果については、本校ホームページや普通科新学科説明会やオープン・ハイスクールで紹介している。また新学科の生徒に見立てた教育と絆コースの生徒の今年度の取組については、1月に授業成果発表会を新設し、当該生徒がプレゼンテーションを行ってコース以外の普通科の生徒にも取組や成果が理解されるよう工夫した。

【発表機会】

- ・ 8月 9日 兵庫県阪神南県民センター「尼崎森と運河の発表会～環境学習フォーラム2024～」(尼崎市立小田南生涯学習プラザ)
- ・ 1月30日 本校「授業成果発表会」(あましんアルカイックホール・オクト)
- ・ 2月 1日 伊丹市立伊丹高等学校「伊丹探究フォーラム2024」(伊丹市立産業振興センター)
- ・ 2月 8日 兵庫県立高等学校探究活動研究会(神戸市立御影公会堂)
- ・ 3月 6日 兵庫県立柏原高等学校「知の探究発表会」(丹波の森公苑)

※ポスターセッションでの質問のみ

次年度は、普通科新学科1年生が普通科新学科説明会やオープン・ハイスクールにおいてもプレゼンテーションができるよう指導していく。

⑩ 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

(特に予算・人員配置について)

指定事業の初年度であることもあり、指定終了後の取組継続のための仕組みについて、先進校等の事例など検討にあたり参考となる情報を収集している状況である。校内組織においても具体的な方策はもちろん方向性について今年度議論は行っていない。

先進校等の事例収集にあたっては、運営指導委員会での委員の指導・助言やコンソーシアム委員会での委員からの意見・提案、同事業指定校への学校訪問、文部科学省指定校発表会での他校とのグループ協議、過去本校が実施した文部科学省指定校事業(「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」)をテーマに行った職員研修などが特に有効であった。

指定終了後の取組継続のための仕組みについて、次年度校内組織において方向性を定め、再来年

度には具体的な方策を示せるよう進めていく計画である。

(1) コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

コンソーシアム委員会では新学科開設に伴う連携事業に係る具体的な提案を各委員に求めている。その内容も事業指定機関終了後も継続可能となるよう伝えている。12月に実施した職員研修会では、講師を務めた他校教員が過去本校で実施した文部科学省指定校事業の実践者であったことから、当日は当時の協力者であった地域の各種団体の方々が多数研修会に参加し、コンソーシアムとして継続的に連携・協力を得られる可能性が大いに広がった。

(2) コーディネーター機能の維持

指定事業終了後、コーディネーター配置の予算措置が難しい場合、コーディネーター機能の教員への移行が考えられることも想定し、コーディネーター単独での活動を必要最小限にし、可能な限り教員と行動を共にし、コーディネーターと教員が互いの職務を理解しあいながら地域との連携を進める機会を増やした。

(3) 取組を継続するためにかかる費用を確保する仕組み

県独自の関連事業への応募・申請、PTAや同窓会の活動における支援、県へコーディネーター配置や事業実施に係る予算的措置を求めていくことなど考えられるが、今年度については、検討は進んでいない。次年度は引き続きPTA・同窓会へは事業内容を積極的に発信し、理解と協力を求めていくとともに、学校と地域との連携事業に係る尼崎市の補助金活用も検討していく。

⑪ 他の事業との関係

本校は令和4年度から2年間の「兵庫県版学校運営協議会（コミュニティー・スクール）」施行校指定を経て、今年度からは実施指定校となった。令和7年度の普通科新学科開設を見据え、学校運営協議会が委員と教職員との意見交換の場としてのみ終わらず、組織としての実効性が伴うよう昨年度委員の選定を見直した。今年度は、学校運営協議会と本事業のコンソーシアム委員会という2つの組織の構成委員を重ねることで協力体制を継続し強化している。

Ⅲ 事業の記録

1 今年度の活動内容

月	生徒の活動	教員の活動
4	・ 2年コース神戸大学生との交流会 ・ 1年コース特別講義「尼崎と県尼の歴史」（正岡茂明委員）	
5	・ 2年コース保育実習（保育園・こども園等） ・ 1年コース特別講義「発声」（甲子園短大特任専任講師） ・ 1年コース特別講義「保育所と地域の課題」（西長洲保育園 伊藤所長） ・ 2年コース特別講義「子どもと触れ合う実習前に」（関西国際大学 下里里枝准教授） ・ 全学年コース合同キンボール	・ コーディネーター研修（オンライン） ・ 第1回新学科説明会
6	・ 1年コース特別講義「絵本」（甲子園短大教授）	・ 尼崎市内公立高等学校合同説明会
7	・ 1・2年コース尼崎の森環境学習①	・ コーディネーター研修（オンライン） ・ 兵庫県立兵庫高等学校「探究完成発表会」視察 ・ 第1回オープン・ハイスクール ・ 第2回新学科説明会
8	・ （課題）1年コース食育に関するレポート作成 ・ 1年コース兵庫県阪神南県民局「環境フォーラム2024」での発表	・ コーディネーター研修（桜美林大学） ・ 職員研修会（関西大学山田剛史教授） ・ 第1回運営指導委員会 ・ 長崎県立松浦高等学校地域探究科視察
9	・ 1年コース関西大学での「探究」特別講義	・ 文部科学省指定校発表会（東京） ・ 第2回オープン・ハイスクールでの新学科模擬授業体験 ・ 第1回コンソーシアム委員会（兼学校運営協議会）
10	・ 1年コース「森のフェスタ2024」実習 ・ 2年コース小学校実習事前模擬授業（1・3年コースも参加） ・ 3年コースこどもクラブ実習	・ 関西大学「教職員対象研修講座」参加 ・ コーディネーター研修②（東京） ・ 第2回運営指導委員会

月	生徒の活動	教員の活動
1 1	・ 2 年コース授業実習（尼崎市立金楽寺小学校 2 ・ 3 年生対象）	・ 兵庫県立御影高等学校視察 ・ 京都市立開建高等学校教育研究大会視察 ・ 第 3 回オープン・ハイスクール
1 2		・ 職員研修（県立夢野台高等学校田畑北斗教諭） ・ 視察受入れ（長崎県立松浦高等学校） ・ 第 2 回コンソーシアム委員会（兼学校運営協議会）
1	・ 「第 1 学年（79 回生）授業成果発表会」（あましんアルカイックホール・オクト）	・ 京都府日星高等学校「総合的な探究の時間（舞W a y !）」最終報告会視察 ・ 第 3 回運営指導委員会
2	・ 1 年コース市立伊丹高等学校「伊丹探究フォーラム 2024」（伊丹市立産業振興センター）での発表 ・ 1 年コース県教育委員会「兵庫県立高等学校探究活動発表会」（神戸市立御影公会堂）での発表	
3	・ 2 年コース尼崎の森環境学習② ・ 1 ・ 2 年コースインターピープル（異世代間交流） ・ 1 年コース兵庫県立柏原高等学校地域科学探究科「知の探究発表会」での交流（県立丹波の森公苑ホール）	・ 第 3 回コンソーシアム委員会（兼学校運営協議会）

2 運営指導委員会の記録

1 第1回運営指導委員会

開催日 令和6年8月26日

会 場 本校会議室

参加者

●運営指導委員（順不同）

- ・山田 剛史（関西大学 教授）
- ・石川 照子（三重大学 教授）
- ・齋木 俊城（神戸大学附属中等教育学校 校長）
- ・小野 義直（（株）アンド 代表取締役）
- ・正岡 茂明（兵庫県立高等学校 元校長）
- ・安福 眞理子（尼崎市立中央図書館 館長）

- ・濱名 陽子（関西国際大学 副学長、当日欠席）
- ・佐藤 賢一（京都産業大学 教授、当日欠席）

●管理機関

- ・森崎 耕輔（兵庫県教育委員会事務局 高校教育課 指導主事）

●本校職員

- ・水嶋 正稔（校長）
- ・中野 公雄（教頭）
- ・中井 香寿代（特色教育推進部長）
- ・豊川 あゆみ（教育と絆コース長）
- ・佐藤 愛美（教育と絆コース担任）
- ・松永 和子（コーディネーター）
- ・林 保典（コーディネーター）

議事録

(1) 校長あいさつ

水嶋校長より

(2) 管理機関あいさつ

森崎指導主事より



(3) 参加者紹介

各参加者から自己紹介

：大学教員の教育力向上に向けてのカリキュラム開発等が普段の仕事。その延長線上で、中・高のカリキュラムや探究に関わっている。

：元は兵庫県立学校の校長。定年退職後に大学教授に転身。

：20年間兵庫県立学校の教員。その後、神戸大学附属中等教育学校に。

：企業向けに企画、課題解決の支援をしている。市立姫路高等学校の探究科学コースを作る際に携わった。

：過去に本校に勤務。現コースの前身・総合教育類型を創設する際に在籍。

：本校との関わりは図書館での場の提供にとどまっている。何か協働できないかと思っていたところに運営指導委員の話をいただいた。

(4) 委員長、副委員長の選出

委員長 関西大学 山田教授

副委員長 京都産業大学 佐藤教授 を選出

(5) 支援事業の概要説明

水嶋校長より説明

- ・ 特色・魅力ある教育の取り組みについて
- ・ 事業の目的
- ・ 新学科の教育課程での具体的な取組について
- ・ コンソーシアム、コーディネーターの体制について
- ・ 生徒、保護者、地域への説明について
- ・ 実施計画
- ・ 今年度の実施計画
- ・ 目標設定シートについて

(6) アンケート結果報告

中井よりアンケートの実施報告

教育と絆コース1年生とコースではない普通科1クラスの1年制及び中学3年生（普通科新学科説明会参加者）対象に実施

(7) 関係施設見学

コンピュータ室、探究ルーム、図書室を見学

(8) 質疑応答、指導・助言

運営指導委員の各委員からの質疑応答、指導・助言

：子どもたちからのアンケート結果を踏まえつつ、本校独自のループリックができれば良い。
スクール・ポリシーと8つの力ができているので、探究のカリキュラムとの対応関係が可視化できると教員の指導上も生徒が学ぶ上でも見取り図になる。
論文でアウトプットすることもひとつの方法であるが、大学でやることを意識して先取りする必要はあまりない。

：本校の生徒の9割が尼崎市民である良さを生かしたらどうか。
普段の授業の中で、探究学習を大切にしていけば良い。
子どもたちがループリックを考えて実行していく方法もある。
アウトプットの方法は論文にこだわらなくてもよい。

：学校として大事にしたいものは何かを忘れてしまうと大変なことになる。
生徒たちにどのような力を身につけさせて旅立たせるのが大事。
生徒たちが面白いことをどんどん見つけてきて、「こんな面白いことやりたい」といったアイデアがどんどん出てくることも探究のひとつ。町や地域に出て尼崎の人たちとタイアップするようなプロジェクトが1つでも2つでもできれば成果になる。

：どういうテーマが設定されて、どことの協力があればより実践しやすいかをコンソーシアム委員会の各委員の方々を中心にどの機関の協力があれば子どもたちが実践しやすいかを想定しながらネットワークを作ることが大事。
子どもたちもインターネットから得られる情報と、生身の人間から教えてもらう情報の質感の違いを体感することで、一步踏み出すことができる。現状、企業団体と高校生の距離があるので、その部分を大人が接続してあげることが大事。

：尼崎市が主催している「サマセミ」（みんなのサマーセミナー）のような場所で発表するのを1つの目標としてもよいのでは。
3年間使って探究活動を行えるため、生徒たちが目標を持って取り組んでもらいたい。探究活動を行うコンセプトの中心をまちづくりにすることで、大学進学に限らず地域の仕事を担うことにも繋がってくる。アウトプットの方法として、論文を書くことも大事だが、尼崎市や大学とタイアップして発表するような機会を持てたらよい。

：中央図書館にかなり古い資料があり、県立図書館からも図書の貸与が可能なので来てもらえたら。

(9) 閉会のあいさつ

水嶋校長より

2 第2回運営指導委員会

開催日 令和6年10月31日

会 場 本校会議室

参加者

●運営指導委員（順不同）

- ・山田 剛史（関西大学 教授）
- ・佐藤 賢一（京都産業大学 教授）
- ・濱名 陽子（関西国際大学 副学長）
- ・石川 照子（三重大学 教授）
- ・齋木 俊城（神戸大学附属中等教育学校 校長）
- ・正岡 茂明（兵庫県立高等学校 元校長）
- ・安福眞理子（尼崎市立中央図書館 館長）

- ・小野 義直（（株）アンド 代表取締役、当日欠席）

●管理機関

- ・森崎 耕輔（兵庫県教育委員会事務局 高校教育課 指導主事）

●本校職員

- ・中野 公雄（教頭）
- ・中井 香寿代（特色教育推進部長）
- ・豊川 あゆみ（教育と絆コース長）
- ・佐藤 愛美（教育と絆コース担任）
- ・松永 和子（コーディネーター）
- ・林 保典（コーディネーター）
- ・守本 龍人（コーディネーター）

- ・水嶋 正稔（校長、当日欠席）

議事録

(1)校長あいさつ

校長不在のため、中野教頭より

(2)管理機関あいさつ

森崎指導主事より

(3) 参加者紹介

各参加者から自己紹介

：所属は生命科学部。いろいろ勉強させてもらいたい。

：15 年間教育学部長をしていたが、その際に本校の教育と絆コースの 1 つ前の世代の生徒が関西国際大学へ授業を受けに来ていた。関西保育福祉専門学校の評価委員を水嶋校長が務めている縁もある。

専門は教育社会学で実践的とは言いがたい。

高校教育の現状などを学ばせていただけたら。

：元は兵庫県立高等学校の地歴・公民科教員。現在も社会科教育を教えている。午前中は四日市の中学校に見学に行っていた。

：兵庫県立高等学校に 27 年勤務。その後、神戸大学附属中等教育学校に移って 11 年になる。

：教育と絆コース 2 年生が授業しているのを見て、入学時に校内見学したときより成長し、頑張っているなど感じた。

：尼崎市立中央図書館にも本校出身の職員がおり、何か手伝えることがあればよいということ話を話していた。

(4) 2 年教育と絆コース小学校実習模擬授業について

豊川より

(5) アンケート結果報告（8 月教員向け）

中井より

(6) 今年度上半期の取組と今後の主な予定

中井より

(7) 次年度学校設定科目「尼ゼミⅠ」について

中井より

(8) 質疑応答、指導・助言

運営指導委員の各委員からの質疑応答、指導・助言

：様々な取組があつてよいと思うが、どのように生徒に対して 3 年間で探究する力を身につけさせるのか。

1 つ 1 つの取組は良いが、御膳立てされて生徒が色々なものを教えてもらうようなものが多

い。もっと生徒が主体的に関われるような、徐々に大人の関与から生徒が中心となるようにシフトしければよい。授業の振り返りに振り返りシートを用いているが、自分自身の経験として振り返りシートを書くことに必死で、課題をやっているように感じた。ICTを使うなど方式を含めて振り返りの方法を考えて、教員同士で生徒の学びをシェアしやすいプラットフォームを作っていくなどして振り返りの効率化をはかれるようにしていくべき。

別の学校にも関わっているが、そちらの学校関係者とディスカッションしているときに、新学科のイメージや何を学ぶかなどが中学生や保護者に伝わりにくい。広報に関わってくることでもあるが、探究というものがモヤモヤする性質を持っているので、興味はあるが何をするかわからないから不安があるという保護者に対して学校としての考え方を提示していくことが大事になってくる。従来型の進学実績を気にする保護者もいるので、探究をやる選択をすることに伴うリスクを払拭することも大事である。

: カリキュラム予定のなかで、春から夏にかけて「尼崎」という言葉が並んでいることが印象的で、尼崎をテーマに探究活動をしていくというメッセージを感じる。探究学習に模範解答はないなかで、本校の強い仮説立てが学習内容に集約されている。この部分を入学してくる中学生に伝わるような見せ方を考えて欲しい。見せ方を考えることは教員が新しい取り組みに対してどのような探究心を持って取り組んでいるか考えることに繋がる。在校生や未来の生徒たちにとってこの取組がどのような意味を持つのかを考えることに注力して欲しい。この3年間で学べて、どのように成長できるのかという仮説の魅力の度合いが迫力を持って訴えかけられるように作っていただきたい。

: 中学生が「尼崎」を前面に出して良いなと感じるか。自分がどう成長できるかの方が興味あると思う。尼崎はあくまでもフィールドであり目的ではないので生徒からしたら尼崎をフィールドにするが、そこで探究をすることで自分にどのような付加価値があるかということが出てこないという意味がない。「尼崎に興味がないです」と言われたらそこで終わり。大人が「尼崎」を前面に出しても、生徒がどう感じているかというところからのメッセージ性というのが大事。

: 新学科になって劇的に違うタイプの生徒が入学してくるとは思えない。教育と絆コースでパイロット的に実施していることとの繋がりが見えてこない。地域貢献という点では理解できたが、身につけさせたい8つの資質のどこに紐付けていくのかということが気になった。まだ新学科開始まで数ヶ月あるのでその間にトライできることがあればしていく。
従来の科目との連携も検討していけたら。

: 午前中に四日市市立の中学校の校長と話をしてきたが、本校の運営指導委員会での話と重なる部分がある。この中学校では総合的な学習の時間に力を入れており、3年生が文化祭で発表するチームの選抜を行っていた。学年で14チームあるうちの12チームは外部人材を生徒たちで見つけてきた。生徒のバックでは教員が支えているが、生徒自身が進んで物事を進めている。学力状況調査によると、ICT活用において全国平均、四日市市平均ともにかかなり高い状況であった。また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいか」という設問も全国平均、しな

い平均と比べてかなり高かった。これは3年間総合的な学習の時間にグループ活動で地域と関わる活動をしてきた結果ではないかとの中学校の校長と話していた。学校で勉強していることが何に結びついているか分かりづらいという問題があるが、中学校では全国調査があるため、比較がしやすい。こういった評価の仕方はどうか。

三重県では探究に力を入れている高校の志願者がとても増えていると聞いている。トップクラスの成績の生徒でも探究がしたいと言って探究に力を入れている高校を志望している。偏差値で志望校を決めるのではなくやりたいことを見つけて志望校を選んでいるのが例年に比べて顕著であると聞いている。

他の教科との関係について、教科で勉強したことが総合学習に関連している、総合学習で勉強したことが教科に生きる。見取りは難しいが、地域の課題に生徒が向き合う中で教科の学習が役に立っている。

来年入学してくる40人の生徒だけが変わるのではなく、新学科設立を契機として本校が進化していくことが目標だと思うので、尼ゼミがとても良かったというのではなく、総合的な探究の時間との関係性や各教科とどう結びついているのかということを、担任だけではなく学校全体の教員が理解して応援していくというカリキュラム・マネジメントの考え方で進めていく必要がある。

: アンケート結果について教員と生徒の間に差が見られる。教員が準備しすぎていて生徒がお客さんのようになっている。教員が力を入れてしまうとそのような傾向になってしまう。失敗するという経験が大事である。神戸大学附属中等教育学校では教員が力を入れ過ぎないようにというスタンスでやっているが、そのスタンスが高校でも有効ではないか。教員側がこのように発表してもらいたい、まとめてもらいたいというイメージを持ってアドバイスをするので生徒が教員のイメージ通りにしなければいけないと思ってしまうが、様々な学力の生徒がいるので、それぞれの生徒の思いや発想を拾って教員が形に出来るように支援するというスタンスがよい。

探究と教科の関係が対立するという関係ではないという認識を教員が理解しなければいけない。教科で学んだことを自分の興味関心のあるものに生かし、分からなくなれば教科科目の内容に立ち返る。新学科が一つの核になって本校全体を良くしていくために進学実績や卒業後の進路を示していく必要がある。生徒に対して「考えることは楽しい」という仕掛けは必要である。

いろんなことをやろうとしている生徒がいるので、うまく乗せてあげると生徒が勝手にやっていくので、生徒の力を信じて任せてあげるときっと良くなっていくと思う。

: 3年生が2年生に対して活発にアドバイスしており、新学科に繋がっていくのではないかと。授業参観は新鮮な感じがした。知の探究は失敗がたくさんある中でも、みんなに見てもらって方向性が決まって進んで出来ていくのではないかと。教育的なことからスタートして探究型の学科になったが、そもそも教育は特別な科目ではなく人間のすべてに関わるものが教育であると思っていて、教員にならなければ教育を勉強した意味がないとはいえない。学んだことを活かしていけたらよい。生徒のやっていることを教員が大学や国が定義しているような言葉で表現して欲しい。生徒が自由にやらせていることを言葉で表現してあげたら、新学科で構想している

ことに繋がるのではないか。

しんどいことはたくさんあるが、そのしんどいことに目を向けることで課題を解決しなければいけないことがある。すぐに結果は出ないかもしれないが、30年後に尼崎のために考えてくれる人がたくさんいる地域になっているかもしれない。

: 高校生が授業で来たことがなく、どのようなことができるか内部で話し合いをしている。図書館には専門書を置いているので、興味のあることを調べるのに気軽に来てもらえるように。それから他のものにも興味を持ってもらえるように図書館を利用してもらえたら。

: 振り返りについて、紙の良さもあるがデータで蓄積していくことを考えてもよいのでは。富山市立の小学校では ICT を活用した学習が行われている。尼ゼミでは取り組む課題が異なると思うので、他者のやっていることを参照して自分のやっているものに良さを取り入れていくことをやってもよいのでは。

: 教育と絆コースで学んでいたが、地域とのつながりはあった方がよいと思う。同級生の中には教育系ではなく他の進路に進む同級生もいた。教育を体験して違う視点が見つかった人もいたので、様々な体験が出来る学科であればよい。

: 計画書をいかに忠実に実行しているか縛られている節があるが、自由に探究を探究して欲しい。地域科学探究科の生徒に3年後どのような姿でいて欲しいか専門用語抜きに教員同士で話し合っていて欲しい。その先に本校らしさがあると思う。

(9) 閉会あいさつ

中野教頭より

3 第3回運営指導委員会

開催日 令和7年1月30日

会 場 尼崎市総合文化センター 第4会議室

参加者

●運営指導委員（順不同）

- ・山田 剛史 （関西大学 教授）
- ・濱名 陽子 （関西国際大学 副学長）
- ・石川 照子 （三重大学 教授）
- ・齋木 俊城 （神戸大学附属中等教育学校 校長）
- ・正岡 茂明 （兵庫県立高校 元校長）

- ・佐藤 賢一 （京都産業大学 教授、当日欠席）
- ・小野 義直 （（株）アンド 代表取締役、当日欠席）
- ・安福真理子 （尼崎市立中央図書館 館長、当日欠席）

●管理機関

- ・森崎 耕輔 （兵庫県教育委員会事務局 高校教育課 指導主事）

●本校職員

- ・水嶋 正稔 （校長）
- ・中井香寿代 （特色教育推進部長）
- ・豊川あゆみ （教育と絆コース長）
- ・松永 和子 （コーディネーター）
- ・林 保典 （コーディネーター）

議事録

(1)開会あいさつ

水嶋校長より

(2)管理機関あいさつ

森崎指導主事より

(3)今年度の事業報告ー成果と課題ー

水嶋校長より

(4)次年度の事業実施計画

中井より

(5) 質疑応答、指導・助言

運営指導委員の各委員からの質疑応答、指導・助言

：（質問）「探究学習をクラスをまたいで実施する」と言っていたが、どのような形で実施するのか。

：来年度はそれぞれの教室で授業をする予定だが、授業に当たってのやり方はタイプなどによってグループを分けて同じような内容で授業をしていく予定。

：大阪府立の高校では、自分のやりたいテーマでオールシャッフルした後にクラスを再編成している。普段とは違うクラスで新しいメンバーとできるので良いなと感じた。

成果発表会での発表を聞いていても、いわゆる普通科の生徒と教育と絆コースの生徒の発表の感じが違うように感じた。教育と絆コースの生徒たちが他の生徒たちに対するリーダーシップを発揮してくれる存在になり得ると考えると、何かしら交わるような、お互いの刺激がブレンドされるような機会があればよいと思った。

今の生徒たちは情報過多の時代で、自分の選択をユーザーレビューに頼ることが多い。以前にも増しておすすめされているものを選択することが多い。昔ながらの宣伝方法ではなく、授業を受けた生徒たちの生の声が見られると、次の世代の生徒たちの心に刺さるのでは。

：今回の成果発表会は個人での発表が多かったが、グループで発表をするという経験も必要ではないかと感じた。来年度以降は評価をしていかないといけないが、生徒や教員の評価と、学校としての評価の仕組みを今から作っていった方がよいのではないか。

：今回の成果発表会は、まだ調べ学習の段階であったが、探究の糸口につながることを生徒たちは話していた。「推し」を入口にして自分の調べてきたことの中に問いを立ち上げることを残りの探究の時間でやって欲しい。教員はそのサポートをしてあげて欲しい。

探究がやらされているものになると面白くないので、自分の好きなテーマを選んで、問いを立ち上げることをすると探究につながるのではないか。

前回の運営指導委員会でもあったお膳立てしすぎと言う点であるが、今回の成果発表会でも、司会を中井先生がされていたが、生徒にゆだねることができないのかなと感じた。昨年、神戸大学附属中等教育学校では大学教員の基調講演の司会と機器の操作を生徒でやっていて、教員は後ろでサポートするという体制でやっていた。生徒にやらせようとするとは込みが大変であるが、山田先生の講評で失敗を恐れないという話があったようにうまく司会ができなかったとしてもひとつの経験になるし、機械の操作も好きな生徒がいると思うので、その生徒たちに任せたらよいと思う。学習活動の中で、生徒に権限を委譲していき、失敗を繰り返しながら多くの生徒が役割を担っていけば、生徒たちの自信になっていく。

：個人で興味のあるものを調べていくほうが自分で責任を持って調べるので良いと思った。ポスターでの発表も行っていたが、綺麗に見せるフォーマットを教えてあげてもよいのではないか。

神戸大学附属中等教育学校では、ある時期から思い切ってほぼ全面的に生徒に前面に出てきてもらうようにした。生徒のことをもう少し信じてあげてもよいのではないかと思った。

評価の話について、5段階評価をつけるとなると大学受験の評定平均に関係してくるので、歪んだ評価になるのは嫌だなというところの心配や課題はある。

: 生徒たちにどんどんやらせていくことはよいと思う。

インターピープルを継続して実施してきたのは良いことで、地域があつての本校であると思うので、そこを売りにしていっていいと思う。

(6) 閉会あいさつ

水嶋校長より

3 コンソーシアム委員会の記録

1 第1回コンソーシアム委員会

開催日 令和6年9月30日

会 場 本校会議室

参加者

●コンソーシアム委員（順不同）

- ・前田 哲男 （関西国際大学 准教授）
- ・津田 江美 （尼崎市総合政策局 中央地域振興センター 中央地域課 課長）
- ・養田 茂雄 （尼崎商工会議所産業部 地域振興グループ 課長）
- ・森 弘 （大物第八社会福祉協会 会長）
- ・上野雄一郎 （株式会社 JTB 神戸支店 教育旅行センター 所長）
（※上野氏は藤田氏の代理出席）
- ・藤田 真吾 （株式会社 JTB 神戸支店 教育旅行センター 教育営業第一課 課長）
（※藤田氏は当日欠席）

●管理機関

- ・森崎 耕輔 （兵庫県教育委員会 高等教育課 指導主事）

●本校職員

- ・水嶋 正稔 （校長）
- ・中野 公雄 （教頭）
- ・中井 香寿代 （特色教育推進部長）
- ・松永 和子 （コーディネーター）
- ・林 保典 （コーディネーター）

(1) 開会あいさつ

水嶋校長より

(2) 管理機関あいさつ

森崎指導主事より

(3) 参加者紹介

各参加者より自己紹介

: 昨年度、学校運営評議会に参加。本校の活性化に貢献できた。

: 職場は中央北生涯学習プラザ。本校生徒とはイベントへ出演するなどして関わりがある。

: 普段は企業向けの支援がメイン。教育との関わりは薄いですが、アドバイスできることがあれば。

: 教育に関する情報は持っていないが、情報交換させてもらってお手伝いできることがあれば。

: 本校とは修学旅行や校外活動などで関わりがある。

(4) 支援事業の概要説明

水嶋校長より

(5) アンケート結果報告

中井より

(6) 質疑応答、協議

: 100 周年を迎えたタイミングで何か変えるというのはいいタイミング。地域の方なども期待感を持っているので、いかに良いスタートを切るかということは大事。コーディネーターにいろんな可能性を探ってもらう事を前向きに進めていくことが必要。

アンケートで尼崎から世界を変えるというテーマがあるが、保護者や地域の立場からすれば地域の学びとどうつながるのかを説明することが大事。尼崎という地域を使って地域との連携の手法を学ぶことで、社会に出た際に学んだことを発揮し、最終的に世界を変えるというストーリーをしっかりと説明しないと、中学生や保護者は疑問に感じるが出てくるかもしれない。

: 尼崎商工会議所と学校が連携して授業を行っている。次世代の産業人材育成事業を産官学連携で立ち上げた。高校生対象にビジネススクールと経営課題解決事業という事業を行っている。尼崎商工会議所の青年部では地域のイベントに高校生がブース出展したり、企業との意見交流会に参加したりするなどを行っている。このような事業を通して身につけさせたい8つの力を養うことができるのではないかな。

探究に関する調査で、アンケート対象の生徒より対象外の生徒の方が数値が高くなっているが、なぜそうなったのかが気になる。

地域探究を選択する理由を具体的に示せたらよい。

: 子供のために地域で活動する団体と地域課を通して繋ぐことができる。

尼崎市ではマナー改善に力を入れているので、市役所の専門の部署や専門の部署と繋がりのある地域の団体に来てもらえれば、市役所の仕事を見ることにも繋がる。

: 地域の組織が高齢化などの理由で弱体化している。若い人が地域の団体の活動に気づいてもらえるようなネタがあれば良い。

: 尼崎の魅力をどのように県外の学校に伝えていくのかが課題。地元の魅力づくりを地元の学生が考えるのをお手伝いできたら。大人が考える尼崎と子どもが考える尼崎のコンセプトは合っているのでは。楽しくワクワクするような素材を入れながらフィールドワークをしていけるようなお手伝いができたら。

(7) 関係施設見学

(8) 閉会あいさつ

水嶋校長より



2 第2回コンソーシアム委員会

開催日 令和6年12月24日

会 場 本校会議室

参加者

●コンソーシアム委員（順不同）

- ・前田 哲男 （関西国際大学 准教授）
- ・津田 江美 （尼崎市総合政策局 中央地域振興センター中央地域課 課長）
- ・養田 茂雄 （尼崎商工会議所産業部 地域振興グループ 課長）
- ・森 弘 （大物第八社会福祉協会 会長）
- ・藤田 真吾 （株式会社 JTB 神戸支店 教育旅行センター教育営業第一課 課長）

●管理機関

- ・浅川 規幸 （兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事）

●本校職員

- ・水嶋 正稔 （校長）
- ・中井香寿代 （特色教育推進部長）
- ・豊川あゆみ （教育と絆コース長）
- ・林 保典 （コーディネーター）

議事録

(1) 開会あいさつ

水嶋校長より

(2) 管理機関あいさつ

浅川主任指導主事より

(3) 2年教育と絆コース小学校実習模擬授業について

豊川より

(4) アンケート結果報告（8月教員向け）

中井より

(5) 今年度上半期の取組と今後の主な予定

中井より



(6) 次年度学校設定科目「尼ゼミⅠ」について

中井より

(7) 地域連携・地域協働の在り方について

中井より

(8) 質疑応答、指導・助言

各委員より意見をいただく

： 少子化の進んでいる地域の高校で地域連携というテーマを掲げるところは多いが、中学生や保護者、地域の方に対して本校の地域連携の特色を職員全員が同じ口で分かりやすく簡単に言えるようにしておくことが一番大事。

地域という言葉が前面に出ると、「地域を限定したことを学ぶんだ、育てるんだ」と取られかねない傾向が他校の状況から見られるが、そうではなく尼崎と言うフィールドで尼崎の様々なところと連携しながら、尼崎で地域連携の仕方を学び、大都市に出たとしても通用するような手法を学んでいくことを前面に押し出した方がよい。

： 課題を探究していくことは仕事をしていく上で重要であると感じるが、生徒の保護者がどう感じるかが重要。高校・大学は就職に結びつけるための通過点であるので、地域探究が将来就職する上でどのように役立つかを中学生や保護者に理解できるような周知をしていくことが重要。地域や企業の課題を考えることで思考力や判断力が身についていくことが大事。そういったことをどうやってPRしていくか。

： (質問) 冊子の中に「探究活動に必要な基礎的技能」という項目があるが、こういった内容のものか。

： 総合的な探究の時間で、インタビューの仕方やアンケートのとり方、課題設定の仕方、情報収集の仕方など。

： 技能を身につけるためにカリキュラムを組んでいると思うが、確実に技能が身につけられるようになっているか検討していくべき。カリキュラムの中で、企業の紹介など商工会議所が関わることができる部分があり、また企業と行政が連携したイベントに高校生が参加してもらうことも可能である思う。

： (質問) カリキュラムの中で尼崎市が絡むものがいくつかあるが、その日程は確定しているものか。

： 3月が近づいてきたら確定するが、まだ確定はしていない。

： (質問) 2学期以降に社会体験活動が始まるが、それは木曜日の5・6時間目に限定するのか。

: 土・日曜日に実施することも考えられる。

: 地域の中でこういった活動があるのか、学校側としてこういったところで体験に行きたいのかなど疑問や相談事などあると思うが、地域課では地域で活動している方と繋がっているので、ご相談していただければ。

: 地域で学習することになると漠然としたものになり、どこに注目すればいいのかや何を学習するのが明確にならない。連合町会で子ども食堂を営んでおり、月 1 回 100 食ほど提供している。食材集めなど大変な作業をボランティアが行っている。そういった作業を見るのも勉強になる。また高齢者のいきいき 100 歳体操をやっているが、面白味はあまりないかもしれない。地域の歴史を学ぶというものが例として挙げられているが、地域歴史資料館から昔の写真をもってきて、現代との比較を個人的にやっているが、それも勉強になるかもしれない。

: 昨年あまがさき観光局と協力して「尼崎の探究」を 17 社から協力をいただいた。地域探究の中で「尼崎のものづくり」と「文化歴史を学ぶ」については、プログラムとして用意している。このプログラムは尼崎市の中高生向けだけに作ったものではなく、県外の生徒向けにも対応している。このプログラムを通じて得られた探究の手法を用いて学んでいくことがこのプログラムのコンセプトである。来年度には 21 社になる予定なので、グループに分かれて 2～3 社訪問する方が比較できてよい。

: 計画性の部分とフレキシブルの部分が探究学習は難しく、3 年間でどういう生徒を育てていくかという大きな枠組みは絶対必要であるが、計画段階ではイメージしていないものが生まれてくることが探究学習の醍醐味であると思うので、大きな枠組みの計画性と細かなところは決めないフレキシビリティのバランスが大事。調整の仕方が教員やコーディネーターの腕の見せ所。

: 地域科学探究科での取り組みについて、効果的な広報をお願いしたい。入学してきた後の取組が肝になってくる。来年度入学生の取組が次年度以降の志願に繋がってくるので、広報に注力していただければ。

連携協力体制を考える中で、取組が持続可能なものであるかを考えてほしい。目玉となるような取組も魅力的であるが、繋がりを持ったうえで持続可能であるかどうかを考えて連携協力体制を構築していくことが大事。取組が恒久的に続くかあるいは継承されていくかは考えてほしい。

(9) 閉会あいさつ

水嶋校長より

4 アンケート調査

1 生徒対象調査

(1)実施目的 本事業の「目標設定シート」の成果目標に関連する質問を行い、今年度の取組の成果を検証する。

(2)対象生徒 本事業対象生徒 : 1年7組(教育と絆コース) 40名
本事業対象外生徒: 1年5組 40名

(3)調査方法 7月(事業開始期)と2月(事業終了期)の2回、両クラスの生徒に同じ質問を行い、数値の変化を比較する。

(4)回答の仕方

4	思う	3	わりと思う	2	あまり思わない	1	思わない
---	----	---	-------	---	---------	---	------

(5)質問項目と2回の調査の結果

※Q3は、2月の調査では『探究』の授業で次の各資質・能力が身に付きましたか」と質問

※各欄とも(事業開始期)⇒(事業終了期)

問い	対象外(1-5)	対象(1-7)	2クラス計
Q1.「探究」の授業に興味がありましたか。	3.0⇒2.7	2.7⇒3.1	2.8⇒2.9
Q2.「探究」の授業内容が理解できましたか。	3.1⇒3.0	2.8⇒3.3	3.0⇒3.2
Q3.「探究」の授業で次の各資質・能力を身に付けたいですか。			
①目標設定力(計画力)	3.0⇒3.2	2.9⇒3.3	3.0⇒3.2
②思考力	3.0⇒3.0	2.8⇒3.1	2.9⇒3.0
③自己表現力	3.4⇒3.5	3.4⇒3.5	3.4⇒3.5
④実践力・実行力	3.3⇒3.3	3.1⇒3.3	3.2⇒3.3
⑤協働する力	3.3⇒3.1	3.0⇒3.4	3.1⇒3.1
⑥当事者意識(主体性)	3.1⇒3.1	2.8⇒3.1	2.9⇒3.2
⑦振り返る力(メタ認知)	3.3⇒3.2	2.9⇒3.2	3.1⇒3.4
⑧広い視野	3.3⇒3.3	3.3⇒3.4	3.3⇒3.4
全体	3.2⇒	3.0⇒	3.1⇒
Q4.高校の学習で「探究」を行うことは重要なことであると考えますか。	3.6⇒3.4 ※「4」回答者率 63.9%⇒46.2%	3.0⇒3.4 ※「4」回答者率 20.0%⇒48.7%	3.3⇒3.4 ※「4」回答者率 40.8%⇒47.4%

(6)分析

各質問における本事業対象生徒の数値が7月(事業開始期)より2月(事業終了期)の方が高くなっており、探究活動に関する意識の高まりがみられる。

2 教員対象調査

(1)実施目的 本事業の「目標設定シート」の成果目標に関連する質問を行い、教員と生徒との意識の差を検証する。

(2)対象教員 53名（臨時講師を含む）

(3)調査方法 7月（事業開始期）の生徒対象調査と同じ質問を8月に行い、数値を比較する。

(4)回答の仕方

4	思う	3	わりと思う	2	あまり思わない	1	思わない
---	----	---	-------	---	---------	---	------

(5)質問項目と調査の結果

Q 1. 「探究」の授業で次の各資質・能力を身に付けさせたいですか。（生徒向けでは「…身に付けたいですか」）

A 1.

育成したい資質・能力	教員	生徒（2クラス）	ポイントの差
目標設定力（計画力）	3.6	3.0	0.6
思考力	3.7	2.9	0.8
自己表現力	3.6	3.4	0.2
実践力・実行力	3.7	3.2	0.5
協働する力	3.6	3.1	0.5
当事者意識（主体性）	3.5	2.9	0.6
振り返る力（メタ認知）	3.5	3.1	0.4
広い視野	3.7	3.3	0.4

Q 2. 高校の学習で「探究」を行うことは重要なことであると考えますか。（生徒向けと同じ質問）

A 2.

教員 : 3.5

生徒（2クラス）: 3.3

※付帯意見

- ・「3」回答者 …但し大学入試が大きく変わらなければならない
- ・「2」回答者 …高校までは基礎学力の充実が優先されるべきと考える。勉強の意義づけ、方向性を認識させる。これを補充する形で探究があればと思う
（高校の段階では）

(6)分析

Q 1において、教員が身に付けさせたいと考える資質・能力と生徒が身に付けたいと考える資質・能力との間に開きがあることが明らかである。

3 参考資料

(1)教員対象調査（8月職員研修参加者回答）

Q 1.「探究」とは、どのような学習活動なのか説明してください。（生徒向けと同じ質問）

A 1.

- ①生徒が主体的に進める活動
- ②何らかの課題に対して解決策を考える、あるいは知識を活用し、深め、応用していく活動
- ③私たち人間が何か行動を起こすとき、全て探究活動であると思う。学習活動のみならず、学校で行う活動は「探究」である
- ④大学で研究する感じ？
- ⑤過去の知識や経験等をもとに、未知の事柄についてテーマ（課題）を見つけ、仮説を立て、実験やデータ分析等を行い、結果を導き出す活動
- ⑥目標を立てて自ら学ぶこと。究めていくこと。疑問を持つ
- ⑦自ら課題を設定し、自ら解決を行っていく学習活動
- ⑧自ら興味・関心のある事項について、知識を得てそれを実践に活かし、主体的に行動することによって、将来の人生観・倫理観を学ぶ
- ⑨疑問・課題に気付いて、それを解決していくか。解決の着地点だけでなく、それまでの過程が大事
- ⑩何かしらの事柄について、疑問などを持ち、その事柄について既習事項を用いて疑問や課題を解決すること
- ⑪興味・関心のある課題・テーマについて、調べたり、分析したり、実験したり、論証したりしながら考え、整理していく学習活動
- ⑫はっきりしていない事柄に対して、じっくり考える姿勢を身に付ける
- ⑬学ぶ「きっかけ」であればよい。知るためにはどうすればよいかを複数選ぶ能力（力）を刺激できる学習活動
- ⑭自ら課題設定を行い、様々な情報を集め検討し、課題解決を図っていく
- ⑮テーマに対し、自発的な調査、考察を行い、他者の見解をもとに修正し、自分なりの結論を導くこと
- ⑯自ら課題やテーマを決め、それについて調べて理解したり、改善策などを思考したりする
- ⑰課題を見つけ、計画を立てて実践、振り返りをする。将来生活する上で、様々な場面で生きる活動
- ⑱自ら学ぶことのできる人材を育成する
- ⑲自ら課題を設定し、それに対する答えや自分の考えを見つけ出し、実践、検証を行う
- ⑳自分で目標や課題を設定し、様々な方法で解決する
- ㉑自分で考えて行動するきっかけとなる行い。学力以外に地域や社会について、日々の生活では体験できないことまでも学生目線で学習すること……？
- ㉒自ら課題を設定し、チームで協同しながら解決していく
- ㉓自ら課題を見つけ、自主的に資料や文献等での調べ学習や実習に取り組み、他との意見交流を行うことで自分の考えを明確なものとする。また、成果発表を行い、他へ向けて伝えることの技術等を身に付け、広い視点を持てるようにする。主体性を持つ、育成する。

- ②④学び方、考え方、主体性を受け取り、それらを生活の上で活用できるような学習をすること。人間性の向上を図ることが重要である
- ②⑤ある課題について、先人の知識を踏まえた上で、自分なりの考えを深め、新たな価値を見出していく学習活動
- ②⑥自分で考え、学び、共有し、そしてまた学びを深めていく
- ②⑦自らが課題を見つけ、主体的に問題解決もできるように他と協力しながら取り組む

Q 2. 新学科「地域科学探究科」や「探究」全般について、要望やご意見があればお書きください。

A 2.

- ①子どもたちの実態に合わせて、少し上の目標を定めさせてください
- ②教師 1 人につき生徒最大 20 名で行いたいです（総合的な探究の時間「セルフ＝ナビ」）
- ③「探究」の重要性はわかるが、知識・意欲ともに低い生徒に探究ができるのかという不安がある（できなくはないが、教員の手助けがかなり必要なのではないか、かなり時間が必要なのではないか等）
- ④どういうものになるか、関わっていない人にはわかりづらい。中学校への P R と志願者の充足に不安が残る。いざスタートしたら 40 人に満ちていないとなるのは寂しい
- ⑤「どのような生徒を育てるのか」共通認識をしっかりと
- ⑥具体的にどのような探究をするのか、また進学にどのように活用できるのか、「科学」が入ったが理科教育を受けていない生徒に科学的な見方をどこで教えるのか
- ⑦探究について知る必要性がある
- ⑧十分な予算と教員の配置（人数確保）、設備、ハード・ソフトの用意
- ⑨尼崎の魅力を思い出し、発信していく
- ⑩指針を設けておく必要があると思うが、いかがか？
- ⑪抽象的な所にとどまらず、具体も必ず入れていく。例えば尼崎の何をテーマにするのか？ 1. 自分の住む地域について知る→ 2. 地域の課題を知り、解決方法を考える→ 3. 自分でテーマを見つけ探究学習を行う（1～2を応用して）
- ⑫生徒の学力が伴わない。自発的な思考ができない
- ⑬よい探究活動の事例や教員の役割の事例を多く知りたい
- ⑭社会に触れる良い機会となつてほしいと思います
- ⑮図書館を活用してください。自主的に学ぶための資料や場の提供、よりよく学校施設を利用、活用してもらうためには、も含めて構築してください
- ⑯生徒が少しでも興味があることには挑戦できるようにできればと思います
- ⑰保健室で話す内容にも探究に活かせるものがあるかもしれないので、保健室で得た情報を随時職員室と共有できたらと改めて思いました
- ⑱新学科への取り組みにどのように関わることができるのか、どんなことができるか、学校として広められたらいいと思う

(2) 生徒対象調査（7月事業対象クラス1年7組の回答）

Q 1. これからの時代、どんな力が必要とされているか？

A 1.

- ①愛嬌
- ②あいさつなど基本的なことができる
- ③アイデア力
- ④相手に合わせる対応力
- ⑤相手の考えを理解する力
- ⑥相手の気持ちを考える
- ⑦相手のことを考えて行動できる
- ⑧相手のことをよく見て寄り添える力
- ⑨頭のやわらかさ
- ⑩新しいアイデアを考えられる能力
- ⑪アピール力
- ⑫意見を出したり、聞いたりすることができる力
- ⑬言われたことを一度で理解できる力
- ⑭A I が必要とされる時代になっても人と関わりを続けられる
- ⑮A I にはない人間の感情・表現力

- ⑯科学力
- ⑰考えて行動する力
- ⑱感情
- ⑲頑張れる力
- ⑳機械を使う力
- ㉑機械を使える技術
- ㉒気遣い
- ㉓行動の力
- ㉔心をもって話せる力
- ㉕コミュニケーション
- ㉖コミュニケーション能力
- ㉗コミュニケーション能力

- ㉘自分の考えを相手に伝える力
- ㉙自分らしさ
- ㉚視野を広くもつ力
- ㉛想像力

- ㉜他人の気持ちを考えられる力
- ㉝探究する力

③④強い精神力
③⑤苦手なことを成長させていく力
③⑥パソコンなどの機械を使える能力
③⑦パソコンや機械の知識
③⑧発想が豊か
③⑨発想力
④⑩発想力
④⑪判断できる能力
④⑫人とコミュニケーションをとる力
④⑬人と積極的に関わる力
④⑭人とのコミュニケーションをとり合う力（コミュニケーション能力）
④⑮人に教える力
④⑯人の感情を読み取る力
④⑰人々を笑顔にさせることができる能力
④⑱他にない、その人しかできないような、真似できないような力
④⑲周りの人と協力することができる力
⑤⑰周りを見る力
51 礼儀よく目上の方を敬う
52 冷静に判断できる力

〔分析〕 本校新学科が設定している「育成したい8つの資質・能力」との関係でみる。

	育成したい資質・能力	説明内容	該当する生徒の回答
1	目標設定力（計画力）	自ら高い目標を設定し、目標実現に向けて計画を立てる。	
2	思考力	情報を分析し、問題の原因や構造を深く考え、因果関係を整理する。	③③探究する力
3	自己表現力	自分の気持ちや考え、意見を相手に伝える。	①①アピール力 ①②意見を出したり、聞いたりすることができる力 ①⑤A I にはない人間の感情・表現力 ②④心をもって話せる力 ②⑧自分の考えを相手に伝える力 ④⑤人に教える力

4	実践力・実行力	掲げた目標や解決したい課題に対して、一歩踏み出し粘り強く取り組み続ける。	①⑦考えて行動する力 ①⑨頑張れる力 ②③行動の力 ③④強い精神力
5	協働する力	異なる世代や背景、価値観を持つメンバーとも協働して物事を進める。	④⑨周りの人と協力することができる力
6	当事者意識（主体性）	身の回りの課題や所属するコミュニティに対して、常に自分事として捉える。	
7	振り返る力（メタ認知）	目標に照らして、自身の現状を客観的に見つめて改善する。	③⑤苦手なことを成長させていく力
8	広い視野	異なる立場を認め、多角的な視点で物事を捉える。	③⑩視野を広くもつ力

(3) 生徒対象調査（7月対象外クラス1年5組と事業対象クラス1年7組の回答）

Q 1. 「探究」とは、どのような学習活動なのか説明してください。

A 1.

【1年5組】事業対象外クラス 39名回答/40名（欠席1名）

- ①ある問題点などを自分で考え、疑問を出し、他の意見を持った人と交流し、自分の考える幅を広げる活動だと思う
- ②思ったことや考えたことを自分で調べたり、まとめたりすること
- ③仮定の中で不思議に思ったことをどうして、なぜかを考え、自分で出た答えを話し合う学習活動
- ④クラスで話し合って意見を深め合う活動
- ⑤答えなどに対して新たな疑問を話し合ったりする活動。相手の意見や自分の意見を話し合う活動
- ⑥自分で考え、それを周りと話し合い、そこからまた深く考えること
- ⑦自分で考えたことを共有、説明などをして、自分の考えをさらに深める活動
- ⑧自分で考えたことを他人に言ったり、自分で疑問を作ったりすること
- ⑨自分で考えたり、探ったりするような力をつけるための学習活動だと思っています
- ⑩自分で考えてまとめた答えを友だちと共有したり発表したりすること
- ⑪自分で疑問を持ち、そのことについて深く調べ、他人に分かりやすく自分の言葉で伝えて共有する活動
- ⑫自分で疑問を持ったことを考える
- ⑬自分で興味を持って相手に意見を伝えたりすること
- ⑭自分で自分なりに自分の知りたいことを知ろうとする行動
- ⑮自分で調べたり考えたりすること

- ⑩自分で一つの物事を調べてノートにまとめたりすること。そして、まとめたことを友だちに共有すること
- ⑪自分で物事を考える力、そしてそれを深める力を身に付ける活動
- ⑫自分の考えた課題などを調べて解決すること
- ⑬自分の考えをまとめたり、他の人と意見を共有したりする活動
- ⑭授業内で能力を身に付けるようにすること
- ⑮授業の内容でさらに深く考えること。自分の思考能力をさらに高めること。様々な視点で考えること
- ⑯将来の選択の幅を広げられる学習活動。気になることを深く学べる学習活動
- ⑰多角的な視点で物事を捉え、それについて考えること
- ⑱他者の意見などを取り入れたり、グループで活動したりすること
- ⑲探究とは、ただ単に言われた課題に対し疑問を持つのではなく、自らの考えで疑問を持ってこそ価値があると思う。だから、自ら疑問を持ち、幅広い視野で見てこそ「探究」だと思っている
- ⑳探究は自分の思いや考えを色々な相手と交流し、色々な視点で物事を考える
- ㉑知識をもとに他の人に伝えていったり考えを深めたりすること。疑問を出すこと。
- ㉒問いについて自分で考えたり調べたりすること
- ㉓問いをもとに考えを深める。資料やグラフを使って考える
- ㉔習った知識などをもとに自分の考えをまとめ、それを発表する活動。疑問や問いの答えとなることを自分で考えまとめる
- ㉕班の人たちと共に話し合い、内容を深めていくこと
- ㉖一つの出来事や物事について、もっと深く追究していくこと
- ㉗複数人のメンバーで資料などを使い、話し合うこと
- ㉘普通の授業とは異なり、グループワークやコミュニケーションなどを主体とするのが探究です。将来に向けて自分が苦手な所などを自分らしくまとめたり発表したりして、将来に向けて成長できる一つでもあります
- ㉙勉強したことを自分でまとめて文字にしたりする
- ㉚他の人と意見を共有して深め合うこと
- ㉛自ら考えて行動に移し、それを相手にどのように上手く伝えるのかというもの。資料などを使ってより伝わりやすくする
- ㉜自ら目標を立て、考え、実践し、周りの人たちと協力して色々な視点で物事を捉えること
- ㉝物事について考える

【1年7組】事業対象クラス 40名回答/40名

- ①尼崎について知ったり、保育関連のことを知ったりできる
- ②ある物事について、詳しく勉強したり、調べたりすること
- ③色々なことを探究する活動

- ④色んな事柄について、深く探究していくこと
- ⑤色んなことを自ら調べて学ぶことだと思います（助け合いも大事）
- ⑥お題に対して自分で考え、考えを友だちと共有して自分の力を高める

- ⑦課題について調べたりする。話し合ったりする
- ⑧学校以外の社会のことや身の回りのことについて考えること。周りの人と意見を言い合うこと
- ⑨学校のことに対して、様々な疑問を持ち、学校のことについて深く知る
- ⑩個人で考えたり、班のメンバーと協力して考えて発表したりと自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりするということ

- ⑪自分が疑問に思ったことや地域の歴史など様々なことを深く調べる学習活動だと思う
- ⑫自分が興味あることや疑問に思うことを自分なりに深めていくこと。新しい発見ができる活動
- ⑬自分が知らないことや、深い学びを学習するためにあると思います。また一人で考える力や周りの人と協力することも大切ということを知ることができ、様々な視野から沢山の観点に気付ける学習
- ⑭自分自身や他の人のことを考えて、それを行動に移していくような活動
- ⑮自分自身を深く見つめ直すことが探究の学習活動だと思います。テーマを設定して、自分にはどのようなことができて、どのようなことが自分には足りないのかを考える時間が多いからです。
- ⑯自分自身を見つめ直す時間と考えています。普段の生活では考えないことを考えるための活動時間だと思っています。また、社会に出た際に協調性が必要ですので、その力を身に付ける時間とも思っています
- ⑰自分たちで計画をし、行動に移すこと。異なる立場を認め、互いに協力しながら情報を分析し、行動すること
- ⑱自分で気になっていることを探す
- ⑲自分のことや身の回りのことについて考えること。様々なことについて考える、探すこと
- ⑳自分の地域について、よく知れるようにする
- ㉑自分の身の回りについて、しっかり考えること
- ㉒自分や地域と向き合い、それに対し自分で調べること
- ㉓自分を見つけて友だちと協力する
- ㉔そのことの本質を見極め、深く学ぶこと
- ㉕そのことを深く知ること
- ㉖それぞれの科目？に分かれて一部は地域のボランティア活動などを行う（地域の取組に参加する）

- ㉗大学に進学するにあたって大切なもの
- ㉘探究とは、自分で物事を考えて人と意見を交換し合い、自分の意見も人の意見も受け容れて、そこからどうするかを判断する。自分で考え、自分で判断することです
- ㉙探究とは、自分に足りない力を付けるための学習活動だと私は思う。あと自分が生きてる世界を知るためでもあると考える
- ㉚探究の授業はみんなで協力する授業

- ③①探究の授業をすることで仲間と協力し合うことができる。地域について学べたりでき、将来地域に貢献することができ、また、近所の人と協力し合うことができるようになる授業
- ③②地域と関わったり、大学の人たちのお話を聞いたりして、そこで教えてもらったり知る課題や目標について、もっと深く研究して自分の意見を深めることだと思います
- ③③何か一つのことに集中して深く掘り下げていくこと。深く掘り下げて自分の能力を確かめ向上させていくこと
- ③④一つのことにについて詳しく調べたり、みんなと話し合ったりして、その意味をより深く理解し、問題について議論し、最終的に自分が思う意見をみんなの会話とかから見つけ出すこと
- ③⑤人にしかできないことを深める
- ③⑥普段の授業からでは得られないような知識を身に付けることができる活動だと思います
- ③⑦身の回りの課題などについて考えたり、目標を立てたりして、話し合う学習活動
- ③⑧目標設定力、思考力、自己表現力など、色々な能力を使う学習活動
- ③⑨物事に対して自分ができることや様々な立場から考え、将来を見つめ成長していくための活動
- ③⑩歴史を振り返り、昔の人はどのような思いを込めて作った物かを考える学習活動

(4) 生徒対象調査（7月事業対象クラス1年7組と新学科説明会参加中学の回答）

Q 1. 尼崎市の魅力って何？

A 1.

【1年7組】事業対象クラス 40名回答 ※複数回答可

- ①遊べる人が多い
- ②芋がおいしい
- ③色々な施設が整っている
- ④色んな施設がいっぱいある
- ⑤大型ショッピングモールや色々な過ごしやすい施設などがあり、暮らしやすい
- ⑥大阪が近い
- ⑦大阪に近いから遊びに行きやすい
- ⑧大阪や神戸と近く、過ごしやすい環境
- ⑨学校が多い
- ⑩学校が多い
- ⑪学校行事などで使用することができる大きな会場がある
- ⑫学校やお店、家が沢山あったりして比較的住みやすい
- ⑬木が多い
- ⑭暮らしやすい

- ⑮暮らしやすい環境
- ⑯警報が出にくいから安心
- ⑰公園が多い（こどもの遊び場が多い）
- ⑱公共機関が便利
- ⑲公共交通機関の充実
- ⑳交通が便利
- ㉑交通の便が良い
- ㉒公立高校が多い
- ㉓こどもが多い

- ㉔サポートが手厚い
- ㉕施設などが多い
- ㉖城がきれい
- ㉗親切な人が多い
- ㉘スーパーやショッピングモールなどが多い
- ㉙住みやすい
- ㉚住みやすい
- ㉛住みやすい
- ㉜住みやすい

- ㉝ダウンタウンがおる
- ㉞地域の人優しい
- ㉟電車が絶対停まる
- ㊱伝統が多い
- ㊲道路が整備されている
- ㊳都会で何でもあって住みやすい
- ㊴どこの人にもあいさつする（他の小学校の人とかおばあちゃんとか）

- ㊵賑やか

- ㊶話しかけてくれる人が多い
- ㊷人が優しい
- ㊸人が優しい
- ㊹便利な町

- ㊺マンションの近くにスーパーがある所が多い
- ㊻道を整えている所が増えてきている
- ㊼みんなが明るくて接しやすい

- ㊽野菜が新鮮

- ④⑨優しい人が多い
- ⑤⑩山がない

【新学科説明会参加中学生】 29名回答 ※複数回答可

- ①尼崎城がある
- ②尼崎城がある
- ③尼崎城がある
- ④尼崎城に行ったとき、面白かった
- ⑤意外と昔っぽいものが多い（お城とか）
- ⑥移動手段が多い
- ⑦イベントが多い
- ⑧イベントが多い
- ⑨色んな取組をしている
- ⑩大きな犯罪が少ない
- ⑪大阪に近い
- ⑫大阪や神戸に近く便利
- ⑬お城とかがある
- ⑭お花がきれい
- ⑮活動が色々ある
- ⑯キューズモール？（※ショッピングモールの名称）
- ⑰公共の設備がある
- ⑱交通が発達している
- ⑲個性的
- ⑳困っている人がいたら助けることができる
- ㉑ゴミを減らすための活動をしている
- ㉒自然が多い
- ㉓自転車でもどこでも行ける
- ㉔住民同士の仲が良い
- ㉕商店街が活発的なところ
- ㉖住みやすい
- ㉗住みやすい（移動が便利）
- ㉘建物が多い
- ㉙建物がきれい
- ㉚楽しい
- ㉛地域のイベントに参加する人が多い
- ㉜ちょうどいい都会

③③つかしん（※ショッピングモールの名称）

③④都会に近い

③⑤賑やか

③⑥人情がある

③⑦人が優しい

③⑧人の明るさ

③⑨フレンドリーな人が多い

④⑩街の人みんなが優しい

④⑪祭りなどの地域おこし？が多い

④⑫みんな優しい

④⑬みんな優しい

④⑭夜でも明るい

5 次年度に向けての計画

1 学校設定教科「地域科学探究」の概要

教 科 名	地域科学探究	
教 科 の 目 標		
探究の見方・考え方を働かせ、地域の人々と連携・協働しながら主に課題解決型学習を行うことを通して、身近な課題を発見し科学的な根拠や方法に基づき解決していくための資質・能力を育成する。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
探究の過程において、地域課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成するようにする。	地域社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。	地域探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、将来にわたってよりよい社会を実現しようとする態度を養う。
教 科 の 概 要		
生活基盤である地域社会の実態や課題を理解し、日常的な興味・関心に基づく課題を設定し、教科横断的・総合的な学習を行う。中心となる活動は課題解決型学習（課題研究）であるが、体験的な活動も重視して課題に関係する地域の協力機関と連携した校外活動も行う。 地域課題の解決を通して予め定めた8つの資質・能力（目標設定力（計画力）、思考力、自己表現力、実践力・実行力、協働する力、当事者意識（主体性）、振り返る力（メタ認知）、広い視野）の育成を目指す。 地域探究活動の指導にあたっては、教員のみならず、専門的立場から地域の関係機関の担当者の協力を積極的に得るものとする。		

2 学校設定科目「尼ゼミⅠ」の概要

教 科 名	地域科学探究	
科 目 名	尼ゼミⅠ	
単 位 数	2	
科 目 の 目 標		
探究対象を身近な地域社会の課題に絞り、地域が抱える課題や魅力を探究し、気づきを発信、共有する。また、社会体験等の独自のプログラムを通して、社会への関心を高め、「地域探究力」の基礎になる問いを立てる力、調べる力、まとめる力、他者の意見を傾聴しながら自分の考えを伝える力を育てる。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
地域における事象や諸課題を理解するようにする。また、探究活動に必要な基礎的スキルを身に付けるようにする。	地域に関して理解したことや気づいたことについて、問いを立て、調査・分析を行い、他者にわかりやすく表現できるようにする。	講義や社会体験活動を通して地域社会への関心を高め、地域の一員として、地域に貢献しようとする態度を養う。
科 目 の 概 要		
「尼崎を知り、尼崎と動く」をテーマに、地域のことを理解し、探究活動に必要な基礎的知識及び技能を習得する。地域の理解と探究活動に必要な基礎的知識及び技能の習得にあたっては、コンソーシアムの自治体・地元企業・大学等の方々を講師として招き講義及び指導を受ける。 併せて地域での社会体験活動も行い、フィールドワーク、地域との協働学習（イベント参加も含む）などを行う。 1年間の取組については、成果発表を行い、次年度の探究課題設定と活動実践に向けて検討を行い計画を立てる。		

3 学校設定科目「尼ゼミⅠ」年間指導計画

学 年：第1学年

教科・科目：地域科学探究・尼ゼミⅠ

使用教科書：なし

単 位：2単位（年間70時間）

研究テーマ	【尼崎を知り、尼崎と動く】 探究対象を身近な地域社会の課題に絞り、地域が抱える課題や魅力を探究し、気づきを発信、共有する。また、社会体験等の独自のプログラムを通して、社会への関心を高め、「地域探究力」の基礎になる問いを立てる力、調べる力、まとめる力、他者の意見を傾聴しながら自分の考えを伝える力を育てることを目指す。
-------	--

期間	指導内容	探究的な学習に関する取組内容	配当時数
第1学期	○オリエンテーション ○県尼を知る ○2分間スピーチ ○尼崎を知る ○知識・技能をつける	・「探究」について理解する ・入学前課題作文をグループ内で共有する ・【外部講師①1h：本校元校長】講義、ワークショップ ・原稿作成、クラス内発表 ・【外部講師②2h：尼崎市総合政策局】講義、ワークショップ ・【外部講師③2h：尼崎商工会議所】講義、ワークショップ ・【外部講師④2h：尼崎市立歴史博物館】講義、ワークショップ ・【外部講師⑤2h：消防署または警察署】講義、ワークショップ ・【外部講師⑥2h：三和本通商店街振興組合】講義、ワークショップ ・【外部講師⑦2h：尼崎市教育委員会】講義、ワークショップ ・【外部講師⑧2h：関西大学教授】探究活動に必要な知識及び技能の講義、ワークショップ	26

第 2 学 期	○夏季休業課題「職業人インタビュー」 ○地域連携校外活動	・「職業人インタビュー」について、クラス内でレポートを用いて発表する ・連携対象機関と課題について調査する ・【外部講師⑨～⑪各 2h（尼崎市役所・大学・企業の各職員による指導）連携機関とともに市内で地域連携・地域貢献のフィールドワーク実施	30
第 3 学 期	○探究活動発表 ○振り返りと計画書づくり	・発表に向けてポスターやプレゼンテーション資料を作成、発表練習、発表 ・年間の活動の振り返り、次年度の課題研究に向けてテーマ（問い）の設定し、計画書を作成	14
探究的な学習を実施する時数の計			70

【評価方法】

課題プリント、レポート、発表資料などの成果物、プレゼンテーション、振り返りシート、授業・校外活動への取組状況などを評価材料とし、育成を目指す8つの資質・能力について、各々5段階に評価したルーブリックに基づき、総合的に評価する。

4 「総合的な探究の時間」の全体計画



5 「総合的な探究の時間」の年間指導計画（第1学年）

学年	内 容 ・ 時 期	
1 学 年 （ 年 次 ）	1 学 期	1 オリエンテーション（配当時間：3時間） ※外部人材 1 h ・ 探究学習とは ・ 探究学習を進める前に ・ 入学前課題の発表会 2 情報を集める（配当時間：2時間） ・ 情報源の種類と信頼性（メディアリテラシー） ・ 情報の集め方と記録の取り方 3 情報を整理・分析する（配当時間：2時間） ・ キーワードや言葉の定義 ・ 新聞記事を用いて情報をまとめる 4 結果をまとめる（配当時間：2時間） ・ 文章の書き方と図・表のまとめ方 ・ プレゼンテーションの方法 5 調査・実験（配当時間：1時間） ・ アンケート、インタビューの手法 6 ミニ探究実践1（配当時間：4時間） ・ テーマ「尼崎の魅力」
	2 学 期	7 課題設定（配当時間：3時間） ・ 問いを立てる ・ 興味関心のマンダラート作成 ・ 課題内容検討会 8 ミニ探究実践2（配当時間：8時間） ・ 自由テーマまたは「尼崎の課題」 9 プレゼンテーション力をつける（配当時間：3時間） ※外部人材 2 h ・ 発声と姿勢 ・ グループディスカッション ・ 傾聴の方法
	3 学 期	10 ミニ探究発表会（配当時間：5時間） ※外部人材 2 h ・ 発表原稿作成 ・ 発表練習・リハーサル ・ 成果発表会 11 総括と次年度に向けて（配当時間：2時間） ・ 1年間の振り返り ・ 次年度に向けて

6 「授業成果発表会」の記録

「令和6（2024）年度 第1学年（79回生）授業成果発表会」

日時：令和7（2025）年1月30日（木）10：00～11：30

会場：あましんアルカイックホール・オクト

1 当日の流れ

- ・ 開会行事 挨拶 校長
- ・ セルフ＝ナビ発表（1年生代表生徒）
- ・ 教育ナビ発表（1年7組 教育と絆コース生徒）
- ・ 講評 関西大学 山田 剛史教授
- ・ 閉会

2 目的

第1学年（79回生）の特色ある授業の成果をまとめ、発表することにより、自分の考えや思いを伝えるプレゼンテーション能力を養う。また、他者の発表を傾聴することで多角的な視点で物事を捉える力を養う機会とする。

3 説明

○セルフ＝ナビ： 総合的な探究の時間。1単位で実施。

○教育ナビ： 教育と絆コース独自の総合的な探究の時間。1単位で実施。

【関連活動】

7/18 環境学習（県立尼崎の森中央緑地）

8/9 兵庫県阪神南県民センター「環境フォーラム2024」での発表

2/1 伊丹市立伊丹高等学校「伊丹探究フォーラム2024」での発表

2/8 兵庫県教育委員会「兵庫県高等学校探究活動発表会」での発表

4 発表内容

(1)セルフ＝ナビ発表 「私の推し尼（西宮、宝塚）」

発表順	タイトル
1	USJ
2	尼崎一おススメなラーメン店！！
3	Do you know ちっちゃいおっさん？
4	私の推し尼 尼崎の木🌲 花🌸
5	才能の街尼崎
6	大変お世話になった🍷尼崎の警報
7	私の推し尼「戸ノ内道じゅねー」
8	私の推し「阪神パーク」

9	私の推し尼「尼崎の住みやすさについて」
10	忍たま乱太郎の知られざる背景を覗いてみよう！
11	奇跡のいも・尼いもについて
12	尼崎市消防局～尼崎の隠れたヒーロー～
13	阪尼のうまうま激安おやつ！！
14	草木は揺らぎ、風は風ぐ。みんなしゅきしゅき☺～尼崎のびのび公園～
15	尼崎って本当に治安悪いん？取り組みや活動は何をしているの？
16	私の推し in 宝塚
17	私の推し尼「阪神タイガースの二軍本拠地」
18	僕の尼の推し「尼の雫」

(2) 教育ナビ発表

発表順	発表者	タイトル
1	6名	尼崎の森環境学習
2	5名	森のフェスタ



セルフ＝ナビ発表（校内ポスター展示） テーマ：「私の推し尼（西宮、宝塚）」

文部科学省 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革推進事業）
令和6年度 実施報告書

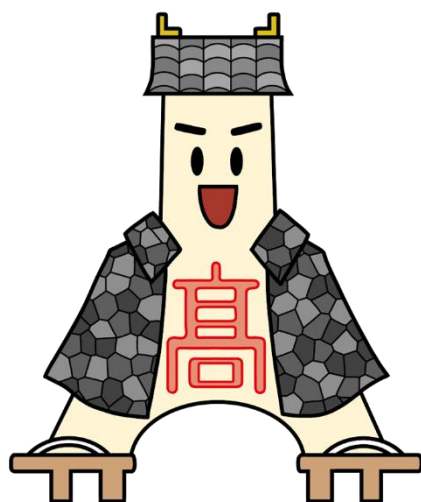
発行日 令和7年3月31日

発行者 兵庫県立尼崎高等学校

〒660-0804 兵庫県尼崎市北大物町18-1

TEL 06-6401-0643

FAX 06-6401-0645



スクール・キャラクター

ことじろう